1 章　中東のテクスト化

1．出 会 い

2冊の中東旅行記が，三人のヨーロッパ人旅行者の三度の出会いについて述べている。それは，ナイル川を旅する，トーマス・レイ（1795－1857）と聖職者のチャールズ・スメルト（1784－1831）の，二人のイギリス人と，スイス人，ヨーハン・ルードヴィッヒ・ブルクハルトとの出会いであった。

先に出版された（1816年）レイの旅行記は，次のように，ブルクハルトとの出会を述べている。

最初の出会いはカイロにおいてで，イギリスの駐在武官ミセット大佐を介して行なわれた――日付けは明らかにされていない。レイがカイロに居たのは1812年12月26日から翌13年1月3日の間であり，ブルクハルトの滞在は12月4日から1月11日までの間で，出会いはもちろんこの間のことである。ブルクハルトはアラブ人の身なりをし，名をシェイク・イブラヒムと名のっており，レイがこの人物の本名を知ったのは帰国後のことであったと注意書きされている[1)]。アフリカ協会によって派遣され，アラブ人諸部族を調査しているこの男は，シリアのベドウィンに捕えられ，6ヶ月間拘禁された後脱出に成功して，今カイロにイギリスのエイジェントの番人として滞在しているとレイは記す[2)]。

二度目の出会いは，上エジプトの町シウト（Siout，現在は Asyût と表記される）で，1月26日のことであった。

ブルクハルトは，レイ達のカイロ出発に前後してカイロを立ち，ロバの背にのり旅をし，今シウトで，大オアシス行の便を待っている所だとレイは述べている[3)]。

三度目は，メハラカ（Meharraka とブルクハルトは記す。今は湖底）付近で，このときレイはブルクハルトの姿の変りようにおどろく。2月27日，シウトを立ったトルコ服の彼が，やせほそったみすぼらしい姿でレイの前に現われる。ひととき歓談し，レイは南の方のイブリム（Ibrîm）でのマムルークの活動についてブルクハルトに教える[4)]――当時アリー・パシャに追われた，前の支配者達は，ヌビア南部に逃れていたが，この頃勢力をもり返しつつあった。ブルクハルトは，この日の日記で，初めてレイ達との出会いについて述べる。レイとスメルトには，すでに二度，カイロとシウトとで出会っていた，と。彼らは，イブリムまでナイルを遡上した，初めてのイギリス人であり，ヌビアの古代遺物を調べていた，とブルクハルトは述べている[5)]。

二人の出会いについての記述の差異は明らかであろう。17才のレイ少年は，相手に，苦難とたたかう冒険小説の主人公の如き姿をみており，捕縛・脱出・疲弊を経験している変装の旅人と記述する。その一方，28才のスイス青年は，相手を探険・調査の歴史の中に位置づけ，考古学調査者の姿をみてとっている。

レイが書いているように，ブルクハルトは，アフリカ協会に派遣された調査者であり，ヨーロッ

パ人の調査に関心を持つのは当然であり，同じ時代に旅をしている者の調査との関わりを指摘していることは十分に理解できる。では，レイとスメルトはなぜ，初めてのイギリス人と呼ばれるほど奥へとナイルを遡るに至ったのか。いささかもったいぶった言いまわしを使いながら，旅行記にそえた序文の中で，次のようにレイは述べている。

> （ナポレオン戦争による）政治情況が，ヨーロッパ大陸旅行の常の道をとざすと，イギリス人の特徴である，じっとしてはいられないという性癖が，遠い東方諸国を探険することで満たされるような時代に，この怠惰で好奇心の強い者は全く新しい方角を求めた。
>
> アテネやコンスタンティノープルの訪問が，パリやウィーンやペテルスブルクで過ごすことのできる陽気で放蕩な冬の代りとなった。そして旅人は，廃墟となった古代の都の記念物の間に身を置いて，文明化されたヨーロッパの近代の都会の悦楽の想いにふけり，あるいは，身をまかすことのできなかった悦楽を惜しんでいた。
>
> 少々ヨーロッパから除けられていた間に，この本の著者は，ギリシアやアルバニアを旅した後，レヴァント諸国の，うちつづく（ペストによる）健康によくない状態のために，エジプトの海岸へと足をむけねばならなかった[6]。

つまり，レイ一行は，イギリス貴族の若様のヨーロッパ旅行——後で述べるように，グランド・ツアーと呼ばれている——が，ナポレオン戦争でできなくなったので，ギリシア旅行に替えたところ，彼の地のペストに追われ，エジプトまで来てしまったと言うわけである。そこにあるのは，ジョン・ブルの冒険好きの性癖であると強調されている。17才の少年が，——いや，出版の際の序文を書いている時と考えれば，21才の若者と言うべきだが——できなかった放蕩を残念がりつつ遺跡のなかに居た，とあっけらかんと述べているのは面白い。

この二人の出会いは，従って，二つのタイプの旅の出会いであったとみられよう。つまり，組織が派遣した調査の旅と，グランド・ツアーの少々枠をとび出した楽しみの教養旅行（ビルドウンクスライゼ）が，中東において出会った，と考えられる。しかし，なぜ大変に類型的とでも言えるこの二つのタイプの旅が出会ったのであろうか。単に事実として旅人が出会ったという以上に，その書かれ方において交差するような形で出会ったという意味は何であろうか。そしてまた，この出会いがどのような形で，後につづく旅に関わるのであろうか。これらの問にいくばくかの答を出すために，この二つのタイプの旅が，このときまでに，どのように営まれ，かつ書かれてきたか，また，この後，どのような形で営まれ，かつ，書かれていったかを，考えてみることにしよう。

2．派遣された旅行者

i　アフリカ協会

ブルクハルトの3冊の中東旅行記は，いづれもその死後，アフリカ協会から出版されている。その最初の旅行記，『ヌビア旅行』の巻頭に，アフリカ協会の当時（1819年）のコミティーの名とメンバーの名がかかげられ，コミティーのウィリアム・マーティン・リーク（1777－1860）による，ブルクハルトの生い立ち，旅行，そして旅行記出版に関する回想録がのせられていて，いかにしてブルクハルトの旅行記がかかれるようになったかがわかる。

そのバーゼルにある邸宅の名から，キルシュガールテン（桜の園）のブルクハルトと呼ばれた，著名なブルクハルトの家系につらなる商人の家に生まれ――1784年11月，ローザンヌにて――ナポレオン戦争の渦にまきこまれて家は没落，ライプツィッヒとゲッティンゲンの大学に学んだ後，1806年，ゲッティンゲンのブルーメンバッハ教授（人類学，1752－1840）の王立学士院（ロイヤル・ソサエティー）長ジョゼフ・バンクス（1743－1820）宛の紹介状をたずさえて渡英した。当時アフリカ協会のコミティーのメンバーであった――実質的には会長――バンクスは，あいついで協会派遣者の死の報告を受け，新たな派遣者を求めており，渡英後ほどなく，ブルクハルトはバンクスと協会主事代理のウィリアム・ハミルトン（1777－1859）に接触する。「科学への情熱と進取の気象」をあわせもち，「天賦の才と学識」をそなえ，強靭な体軀をもったブルクハルトは，1808年，派遣者と認められたとリークは述べている[7]。

このリークのブルクハルトの生い立ちの記に少し言葉を加えれば，ヨーハンの父ルドルフ――つまりキルシュガールテンのブルクハルト――は，若い頃に個人教師をともなった教養旅行を行ない，芸術を愛し，ゲーテやローザンヌ滞在時代のギボンと親しく交わっていた教養人であった。このヨーハン[8]が生れ育った家庭は，18世紀末の教養旅行の空気を充分にすいこんだ家庭であったと推測される。父は，1764年から5年にかけてイタリアを旅したギボンと，1786年から8年にかけてイタリアを旅したゲーテと交わりを持っていたのだから。そのギボンは1789年にアフリカ協会のメンバーとなっている。ギボンは，ヨーハンが協会に接触したときにはすでに亡くなっていたとは言え，ブルクハルト家とアフリカ協会とは，イタリア旅行を介してつながれていたとみられよう。さらに，ブルクハルトの旅行記と，ヨーロッパの伝統の教養旅行の接点を明らかにするのは，ブルクハルトがナイルの土地で会ったトーマス・レイの名が，ブルクハルトの旅行記の巻頭のアフリカ協会のメンバーのリストの中に見い出されることにおいてであろう。イタリア旅行からしめ出されたレイは，そのエジプト・ヌビアの旅から帰ると，国会議員に選ばれ，アフリカ協会のメンバーとして認められていた[9]。

個人的に伝統の教養旅行と深く関わっていたブルクハルトを旅に出し，今我々の手もとにあるようにその旅をテクスト化させた，アフリカ協会とはどのようなものであったのか。ここで，この協会について，アフリカ調査史研究家のロビン・ハレットによりながら，みてみることにしよう[10)]。

近代のロンドンでは，タヴァンにおいて紳士のための社交と娯楽のための集会が流行していた。それはクラブと名づけられていたが，そのうちの一つに，ペル・メルからわかれたセント・アルバンズ通りのセント・アルバンズ・タヴァンに集ったサタデイズ・クラブと呼ばれたクラブがあった[11)]。その12人のメンバーが，アフリカの地図のまっ白な空間をうめようと設立したのが，アフリカ協会，正式にはAssociation for Promoting the Discovery of the Interior Parts of Africaと呼ばれた，探険家派遣の組織であった。

12人の設立メンバーは，王立学士院長バンクス，ワイン商人の息子でクエーカー教徒，国会議員のヘンリー・ビューフォイ（？－1795）――最初にこの協会のアイデアを出したのがこの男だと言われている――，アイルランド貴族で福音主義者のキャリズフォート伯(1751－1828)，ホラス・ウォルポールの親友で退役軍人のコンウェイ将軍(1719－1795)，地主で国会議員のアダム・ファーガソン（1733－1813），ロンドンの富裕な医者のウィリアム・フォーダイス（1724－1792），ピット首相の下で権勢をほこっていたウィルバーフォース(1758－1815)――彼も設立の翌年メンバーとなる――の友人，福音主義者のギャロウェイ伯（1736－1806），ケンブリッジ大学の化学と神学教授を歴任し，ランダフの司教となったリチャード・ワトソン（1757－1816），イギリスの最も豊かな平民と称されたウィリアム・パルトネイ（1729－1805），アイルランド貴族の息子で，軍人として活躍したロードン卿（1754－1826），スコットランドの地主で統計学者，国会議員のジョン・シンクレア（1754－1835），法律家のアンドルー・ステュアート（？－1801）といった面々であった。貴族が３人，議員経験者が５人，学者が４人，法律家・宗教家・医者は各１人，富裕者と名ざしされたのが２人，軍人が２人，――それぞれダブっているが――というのがメンバーであったと整理される。この内６人が王立学士院の会員であった。また，ほとんどの者が大地主であった。新しい時代の息吹きを感じとり，実行力が政治的にも経済的にもあり，世界の知的探求心をもった彼らが，ジェイムズ・クックの世界周航に従ったバンクスや，ビューフォイのアフリカの空白部の解明の意欲に同調したのは理解し易い。設立は，フランス革命勃発前年の，1788年６月９日のことであった。

この協会は，主事（セクレタリー）と財務管理人（トレジャラー）が各１名，コミティーが５名（1804年以降８名）――１年毎の選挙で選ばれ，派遣者の選定，通信，基金の管理にあたった――，それにサタデイズ・クラブ（1799年にアフリカン・クラブと改称される）のメンバーが選定した会員によって構成されていた。派遣の資金は会費（５ギニー）によってまかなわれた。1831年，王立地理学協会（ロイヤル・ジェオグラフィカル・ソサエティ）に併合

される時までの収入は1万3千ポンドで，内9千ポンドが派遣に使われたとされている。会費を支払っていた有効会員の数は，1791年で109人，1799年で57人，1810年で75人，1819年で46人，最後には14人が会合に出席していたと記録されている。協会の会員については，ハレットのリストによる他はないが，それによると延べ215人がメンバーとなっている。会員の構成を整理すると，貴族，政治家（首相，大臣経験者を含む），外交官（植民地総督を含む），商人（東・西インドとアフリカ），事業家（銀行家，酒造業者など），軍人，学者・文化人，宗教家，それに奴隷廃止論者や福音主義者といった人々が挙げられる。18世紀末のイギリスの「支配階級の小宇宙」を，アフリカ協会の会員にみることはたやすい[12]。そこで注意をひくメンバーをピック・アップしておこう。

首相経験者には若い頃ギリシアにのめり込んだ――バイロンがアテナイ人と呼んだ――アバディーン伯（1783－1810）が居る。東インド会社関係では，3人の支配人が――3人とも国会議員になっている――メンバーとなっており，オリエンタリストとして著名なウィリアム・マースデン（1754－1836）も東インド会社に籍をおいていた。外交官では，設立者の一人ロードン卿――ヘイスティングズ侯として著名，もちろん，ウォーレン・ヘイスティングズとは別人――がインド総督となっており，セイロン総督となったフィルヘレニストのフレデリック・ノース（1766－1827）がいる。ブルクハルトを援助したエジプト総領事のヘンリー・ソールト（1780－1827）も注目される（但し，名誉会員）。ロバート・バークレー（1751－1830）や，ヘンリー・ホー（1750－1828），チャールズ・ホー（1767－1851）といった銀行家の名もメンバーの中にみられる。酒造業者ではサミュエル・ウィトブレッド（1758－1815）――ウィトブレッドのビールは今でもイギリスで口にできる――がその名をつらね，陶器で有名なウェッジウッドはその創業者のジョサイア（1730－1795）をメンバーに出している。前述のコンウェイ将軍やウィリアム・リークは軍人であったわけだが，トルコ・エジプトで軍務についたリークがギリシア研究者であった様に[13]，軍人であると同時に研究者としてアフリカ協会に加った者もいる。インドで軍務につき，後ベンガル調査を行いインド地図を作り，またアフリカの地理学者でもあった，ジェイムズ・レンネル（1742－1830）がそのアフリカ学との関わりからも注目される。著名な軍人としては，ナポレオンと中東で戦った海軍軍人シドニー・スミス（1764－1840）があげられる。学者や文化人として著名な人物にギボンが居るわけだが，その他に，古代美術の権威であったリチャード・ナイト（1750－1824），古典学者のチャールズ・バーネイ（1757－1817），科学者のヘンリー・キャヴェンディッシュ（1731－1810），ウォルター・スコットの友人の作家ジョージ・エリス（1753－1815）といった人々がメンバーとなっている。奴隷廃止論者には，ロンドン伝道協会――後にリヴィングストンによって有名になった協会であることは言うまでもなかろう――の設立者の一人，ジョゼフ・ハードキャッスル（1752－1819）が居た。

こうした，イギリスの支配層を作る会員によって，アフリカ内陸の旅が経営されていった。会員達の中には，グランド・ツアー経験者も，海外調査経験者も居る。発起人の一人，バンクスが，ジェイムズ・クックの旅の経験者であったことからも，旅の経験者が新たな困難な旅の企画者であったことがわかる。経験者が新参者を旅に誘う。これが，アフリカ協会の特徴の一つであると言うことができよう。

アフリカ協会によって送り出された者は，ブルクハルトを含め10名。その内旅行中に死亡したのは7名である。運よく旅からもどり旅行記を出版できたのは，ニジェール川の流れを明らかにした，マンゴ・パーク（1771－1806）ただ一人である。このような危険な旅を企画した者達の旅との関わりを，もう少し詳しく，とくに旅という形と社会との関わりを含めて，みてみることにしよう。

ii　ディレッタント協会

アフリカ協会の会員リストをよくみてみると，二種類の組織が指摘される。一つは，東インド会社やシェラ・レオーネ商会といった通商団体，そしてもう一つは，王立学士院のような知的グループである。王立学士院会員は，215名のアフリカ協会員中94名を数えている。こうしたグループの中で，とくに旅に深く関わりを持つものが，ディレッタント協会（Society of Dilettanti）である。アフリカ協会員中31名がディレッタント協会員だから，7分の1に当る。19名のコミティーの内7名が，コミティーのメンバーにならなかった主事・財務管理人・議長――全部で9名――の内4名が，この協会員である。王立学士院会員を除けば，ディレッタント協会員は，アフリカ協会で目立った存在のようである。アフリカ協会員で王立学士院会員の内ディレッタント協会員でもある者は21名におよんでいる。この中には，世界周航（1768－1771年）のバンクス，トルコ・エジプトを調査した（1801－1802年）ハミルトンとリーク，ギリシアを旅した（1803年）アバディーン伯，ギリシア・トルコを旅した（1810－1813年）フレデリック・ノース，そして，ブルクハルトと出会ったレイ，といった著名な旅行者たちが含まれている[14)]。バンクス，ハミルトン，リークは主事を務め，ノースは議長を務めており，バンクス，アバディーン伯，それにリークはコミティーのメンバーとなっている。ディレッタント協会―王立学士院―旅行―アフリカ協会幹部というつながりを，彼らの経歴からみることができるだろう。それはどういうことを意味するのであろうか。

1734年に創設されたディレッタント協会は，イタリア旅行を経験した若い貴族達によって構成され，サンドウィッチ伯やホラス・ウォルポールが，その名をつらねていた。「（旅行者の）外国での楽しみに多大の貢献をなした様々なものに対する，自国での好尚を奨励す」べく集った，

ウォルポールによれば，それを口実にした酒飲みの会であった[15]。芸術の鑑識力を高め，好古趣味を広めようと，グランド・ツアーの若様達が作ったクラブである，とディレッタント協会は理解される。この貴族色の強い，芸術好みと好古趣味の精神は，初期にアフリカ協会員となったディレッタント協会員にも流れているように思われる。1760年代にディレッタント協会に加わったアフリカ協会員は，ノーサンバランド公（22才），美術品収集家のパーマストン子爵（26才）——首相の父——，文学のパトロンであったバックルーチ公（21才），芸術のパトロンであったカーライル伯（19才）——彼はバイロンの後見人——であった。

イタリア旅行者による芸術趣味の集りが，ギリシア・小アジア・エジプト旅行への興味を持つようになったのは，もちろん，設立者の一人サンドウィッチ伯自身，1738年から9年にかけて，この旅を経験した[16]，ということにすでに明らかであるのだが，1750年に，協会が，ローマのイギリス人芸術家のコロニーに居たジェイムズ・スチュアートとニコラス・レヴェットという二人の芸術家を，ギリシア・小アジアへと考古学的——と言うよりは好古家の——調査を目的として派遣したことではっきりとする。彼らは旅の後『アテネの古代遺物』という本を出したが，この本によりギリシア嗜好が時代の流行になった，とギリシア旅行の研究者ダミアーニが述べている[17]。社会の上層部（アッパー・オーダー）を形成する，旅の経験者がグループを形成して，若い有能な人々を旅へ派遣し，その旅を描かすというアフリカ協会の手法は，40年近くも前にディレッタント協会が作りあげていたものであったことがわかる。協会はさらに詳しい調査をするために，好古家のリチャード・チャンドラー，レヴェット，画家のウィリアム・パースを，1764年から6年にかけて派遣する。この成果も，チャンドラーの手によって出版されている[18]。こうしてイタリア旅行の経験者の集団が，イタリアの彼方への旅へと若者を参入（イニシエイト）させ，その旅をテクスト化させていたのだった。しかも，この協会は，別にイタリアの彼方への旅行者をも，自らのグループ内にとり込んでいた。先に述べたように，バンクスやハミルトンらのアフリカ協会幹部は，そうした旅の後ディレッタント協会に加えられていた。このような旅行者のとり込みは，協会派遣者の出現とほぼ同じ頃にみることができる。その旅行者が，チャタム卿の国務次官を，アフリカ協会員となったビュート首相のもとで大蔵大臣をつとめた，古典考古学者のロバート・ウッド（1717？－1771）であった。

東欧・中東の旅の経験者であったウッドが，歴史学・建築学者のジェイムズ・ドーキンズらをともなって，イタリア・ギリシア・小アジア・シリアの旅を行なったのは，1749年から51年にかけてのことであった。この旅の成果が，『パルミラ遺跡』（1753年）と『バアルベク遺跡』（1758年）であった[19]。これら，ローマとアルサケス朝ペルシア（パルティア）との緩衝地の遺跡については，後でふれることになろう。ここでは，彼の旅が，ディレッタント協会の意図と交差するものであったことを指摘しておこう。つまり，一つには，この旅の途中で，ディレッタント協会

に派遣されたスチュアートとレヴェットに会い，共に小アジアを旅していたという形で，もう一つは，崇高の美学で有名なエドマンド・バークの友人である彼の作品がウォルポールによって称賛されたという形で明らかにされよう。真にモニュメンタルな芸術的価値の高いものをイギリスに紹介したものとして，協会員のウォルポールの称賛を受けたということである[20]。そして，1763年，ウッドはディレッタント協会員に加えられ，その後にディレッタント協会によって派遣されたチャンドラー達の成果に序文を寄せるに至っている。このウッドが序文を書いたチャンドラーの『イオニアの古代遺物』(1769年）は，ギリシア考古学事始めの位置を占めるものであったという[21]。

こうして，ディレッタント協会によって，イタリアをこえ，小アジアをこえた旅の経験者を集積しつつ，社会の上層部が，そうした旅へと若者を参入させ，より詳細な記録をもたらす旅＝調査を遂行させていったことがわかる。それがアフリカ協会をまきこみ，さらに世界へと拡大した視野のもとで，若者の参入を可能にする組織が作られていったと理解されよう。こうした，若者を旅に参入させる社会のシステムは，イニシエイションとしての旅と考えられよう。そこで，貴族の若様を成人させる古典的な形式とされてきた，グランド・ツアーについて考えてみることにしよう。それがディレッタント協会を生み出すもとであったのだから。

iii　グランド・ツアー

17・8世紀のイギリス貴族の若様の，ときには数年にわたる，フランス・イタリアへの教養旅行は，グランド・ツアーと呼ばれてきた。この上流階級の若者の旅には，個人的な家庭教師（チューター）がつき従った。そうした教師・助言者（メンター）の一人，リチャード・ラッセルズが，その著書『イタリア旅行』（1670年）の中で初めてグランド・ツアーなる語を使い，その書は，F. M. ミッションの『イタリア旅行』(1691年）とともに，グランド・ツアーの最も人気のあるガイドブックであったと言われている[22]。若様に同行した教師が，ガイド役として，新たにこの旅を志ざす者を旅の経験者の世界へ参入させる者となっている。こうした旅行者（ツーリスト・ナラティヴ）の話において強調されてきたものは，1620年以前は公の出世のための修業として外国の政治を学ぶことであり，20－70年の間では品位を高め芸術にふれることであったが，70年以降科学的な調査や外国人の習慣・政治・芸術についての他の人文主義的な研究が強調されるようになったと言われている[23]。18世紀の旅行者の一人，トーマス・ニュージェントは，その旅行記『グランド・ツアー』(1749年）の中で，グランド・ツアーとは，「知識によって心を豊かにし，判断力を正しいものにし，教育による偏見を除去し，外にあらわれる作法を調え，つまりは，完全なるジェントルマンを形づくる」習慣であるとしている[24]。

一応の勉強を終え――大学へ行ったにせよ，いかないにせよ――家の富を相続するまでの間，上層社会の成人としての仕上げの期間において，若者は，特権であったグランド・ツアーで，いかなる教養にふれ得たのであろうか[25]。到着の土地で，貴族の若者は，その宮廷にまねかれ，舞踏会や狩猟の会に顔を出し，廷臣や外交官の社会に交わる，といった活動を行なっている。こうした宮廷社会との接触は，イギリスの外交官の役割とされ，グランド・ツアーにおける社会教育の根幹とされていた。宮廷社会は，一般に，イギリスとの関係如何にかかわらず，旅行者に対して開かれてはいたが，旅行者の増加，とくに中流階層（ミドリング・オーダー）の人々の旅の進展にともなって，紹介状が必須なものとなっていた。このようにして接触できた人々の中から，政治中枢を占める者が選ばれていた時代であるのだから，こうした接触は国際政治の理解に不可欠なことであった。宮廷社会との接触は，また，社交術を学ぶべき機会であったことは言うまでもない。政治体制に関する観察から，共和制に対する両義的な言及や，専制政治への非難――圧政下の人々のみじめさ，貧しさ，荒廃した生活，迷信深い生活，不潔な生活空間が指摘されて――を行ないつつ，そのような政治体制下における法や習慣を自国のものと比較して，イギリスがより自由な国であることを確認し，自国への自信を新たにするというのが，一般的な旅行者の言表であったと言われている。そして，グランド・ツアーは，言語修得の機会であり，芸術の鑑識力を高める機会であった。オペラにひかれ，イタリア絵画を求め，パラディオの建築を好むのが多くの旅行者の常であった。

こうした教養を修めることによって，旅行者は，実社会でジェントルマンとして受入れられるに足る人物になるものと言明されている。この移行を可能にするためには，いくばくかの旅の苦労と，性やギャンブルの放蕩は，当然払わねばならぬ代価と考えられていた――もっとも，かなり目に余る放蕩さが報告されてはいるけれど[26]。

こうしたグランド・ツアーにみられるような移行が，未開社会や部族社会において制度化され，宗教学者や人類学者によって，イニシエイションと名づけられ研究されてきたことはあらためて言うまでもない。それは，子供が成長し社会に一人前の成人として受け入れられるようになるために，また，人が特別な技能集団や宗教組織の成員として受け入れられるようになるため，行なわれる通過儀礼と考えられてきた。この儀礼は，新参者（ノヴィス）の社会的，宗教的地位の急激な変化・移行を体験させるもの，とされている。一つのアイデンティティーから別のアイデンティティーへの移行が意味されている。その際，新参者は以前の社会的地位・環境から切り離され，日常の生活から分離される。新参者は，こうして，非日常的な，聖なる空間の中へ投ぜられ，別の存在へと移行する過程を歩ませられる。そして一定の期間の後，別の地位を得たものとして，社会に統合され，合体する。つまり，分離，移行，合体という形態を通過することとなる。ヴァン・ジェネップ（ファン・ヘネップ）の，著名な通過儀礼の図式がこれである[27]。

これに対して，グランド・ツアーの状況は，一方では貴族の成人のための仕上げの行為として

考えられ，また一方で，旅の経験者集団——たとえばディレッタント協会——への入会の要件と考えられていた。そこで，旅の形態をみてみると，イニシエイションと同様の形態を通過しているのがみてとれる。旅行者は，自らの文化で修められるのとは異なった教養にふれるべく，日常の世界から離脱することで旅をはじめる。旅は，別種の，異なった文化の中で進められ，旅行者は，空間的でかつ文化的な移行を経験する。そして，一定の期間の後，二つの世界，文化の経験者としての地位を獲得して，再び日常の世界に統合される。離脱（分離）・進行（移行）・帰還（合体）という形態を通過するものと旅は考えられる。

通過儀礼としての，イニシエイションと旅の類似は，すでにヴァン・ジェネップによって，次のように言及されていたことである。

> 人は家庭や，部族の人々の間にいる時は世俗の領域で生きているが，旅行に行き，知らない人たちの野営地のそばに，よそ人として存在する時には聖なる領域に移る[28)]。

> すべての巡礼者は，出発の時点から帰還の時点に至るまで，通常の生活の外の，一種の移行期間内に身を置いたのである[29)]。

イニシエイションにおいて新参者は種々の試練にあい，それを克服して自らを高めるのだが，旅行者は，種々の危険に遭遇し，それをのりこえて旅をつづけると語られる。イニシエイションでは，非日常の存在と化することによって，新参者は種々の拘束や禁止を経験するとともに，普通許されぬ行為——盗みや性行為といったもの——が特別に許されるように，旅において旅行者は，到着地の習慣に従わせられるとともに，放縦が許容されると語られる。もちろん，イニシエイションも旅も，その教育機能が強調される。イニシエイションでは，経験者が新参者を参入させるべく特別の役割を果すように，グランド・ツアーでは特に，家庭教師が若い旅行者を旅の世界へ参入させていた[30)]。ディレッタント協会の会員である旅の経験者が若い旅行者を旅の世界へ参入させていたのも同様であると言えるだろう。

エリアーデが明らかにしているように，イニシエイションは，制度以外に，文学のテーマとしてあらわれ，とくに近・現代ヨーロッパにおいては，こうしたフィクショナルなイニシエイションがもてはやされているのが特徴的であると言うことができる。たとえば，エリアーデは，アーサー王伝説・物語にイニシエイションの筋書きを指摘する。主人公達の聖杯探求は，異世界への移行を意味し，数えきれぬ試練が与えられ，不死を征服し，荒野を再生し，王の病を治し，統治を手中におさめる，というイニシエイションの世界であることが明らかにされている。こうしたテーマは，ジョイスやエリオットがひきうけていた。近・現代のヨーロッパ人は，読書を通じて，

イニシエイションと関わりつづけていると考えられよう[31]。そして，このテーマは，そのまま旅行小説のテーマであると言うことができる。旅行小説の主人公も，冒険への招きに従い出発し，種々の試練を経て移行を果し，最後には二つの世界の勝利者として帰還すると整理される。こうした冒険小説の構造は，実際の旅行記にもみることができる。旅行文学の研究者パーシー・アダムズが言うように，ヴァスコ・ダ・ガマからジェイムズ・クックに至る探険者達に，冒険への誘いにこたえ，探険を達成させて帰還した，イニシエイションのテーマをひきうける旅行小説の主人公の姿を見ることができよう[32]。この姿こそ，グランド・ツアーをいささか延長させて旅を行なっていたレイが，ブルクハルトの中にみたものであった。困難な旅へと若者を参入させる側の人々が，参入する旅行者の姿を，イニシエイショナルな冒険小説の主人公の姿に重ねあわせているとすれば，この旅行者の手になる旅行記は，そうしたテーマをひきうける種々の書物と比せられ，また重ねあわされて理解されるということになろう。

さて，グランド・ツアーからディレッタント協会へ，という展開において，参入させる者が旅行者と同道する旅から，経験者が参入させる者として組織を造り，旅行者を送り出すという旅の組織化への変化をみてとることができた。この組織によって旅を経験した者は，この組織への参加者でもあった。イニシエイションとみられるグランド・ツアーの経験者によって，イニシエイションとしての旅によって参加を許す組織が作られていたと整理することができる。そして，さらに，この組織が一部を形成する，新たなる旅行者派遣の組織，アフリカ協会ができたわけである。ここでは，参入させる側が自らは到達不可能な場所へ旅行者を送っている。旅の経験者と組織者は，新たな旅へ参入する者とは区別され，旅が専門化されてゆくという過程がみてとれるように思われる。そうした過程が進む中にあって，旅行者は，グランド・ツアーからの――もちろん，歴史的には，それ以前のすべての旅行記と旅行文学が描く旅からの，と言うべきだが――イニシエイションの参入者の姿をひきうけさせられつづけていたわけである。

iv　調査の旅行者

旅の経験者が，旅が構成する世界へと，若者を参入させる。そうした社会のシステムが，より拡大された視野のもとで，より専門化した旅を生成する。そして，旅行者の方は，そのような専門的な旅に適したものであるべきだ，という要請に従うようになってゆく。それは旅という手法によって獲得される知の専門化を意味する。派遣された旅行者は，より専門的な調査者へと変貌する。この変化の姿を，中東旅行記を生んだ，限られた旅行者を通して，考えてゆくことにしよう。もちろん，ここでの事例が，19世紀のすべての知の展開を明らかにする，などと一般論化してみせるつもりは全くない。

エジプト考古学調査者

最初にとりあげるのは，1810年代の旅行者のベルツォーニ（1778－1823）と，1840年代の旅行者のレプシウス（1810－1884）の，二人の考古学調査者である。エジプト考古学史の上から言えば，シャンポリオンによる聖刻文字（ヒエログリフ）解読という出来事の，以前と以降に登場する著名な二人の人物，と言うことができる。

1815年５月にマルタ島を発ってエジプトへ行き，1819年９月ヨーロッパへの帰途につくまでを描いた旅行記の作者，ジョヴァンニ・バティスタ・ベルツォーニ[33]は，その序文の中で，パドヴァに生れ，ローマで水力学を学び，ナポレオン戦争でイタリアを離れ，1803年イギリスに到着し，結婚し，９年間をイギリスで過ごした後，ポルトガル，スペインを経てマルタ島に渡り，水力学の知識で一旗あげようとエジプトへ赴いた，と述べている[34]。この知識を応用し，灌漑用の揚水機を試作したが，アリー・パシャの前での試用の際，事故を起こし，エジプト政府の採用許可をとりつけるのに失敗したベルツォーニにとって，カイロで出会ったブルクハルトの情報は重要であった。その情報とは，古都テーベ（Thebes）にある，「若きメムノン」として知られた巨大な胸像を摂政宮へのプレゼントにするようアリー・パシャを説きつけ，イギリスへ運搬しようという計画だった。アフリカ協会の名誉会員であったヘンリー・ソールトが1816年に総領事として着任したところで，ベルツォーニはこの計画を実行し，大英博物館へおさめることをソールトに提案した。エジプト来訪の目的を果すことに失敗していたベルツォーニは，幼い頃ローマで得ていた古代遺物に対する情熱ゆえに，ナイルを遡上し，古代エジプトの遺跡への好奇心を満たすべく決意したと述べ，イギリス政府に雇われて大英博物館に収めるべき古代遺物を調査したことはないと書きしるしている。1810年代の英仏間の古代遺物収集に関する確執にまきこまれた，寄方なき男の，これは矜持の言というべきであろう。ともかく，イギリス総領事の，「若きメムノン」運搬に関する，一切の便宜供与を受け，運搬成功の際には経費は償われる旨の訓令をソールトから得て，古代遺物の搬出と遺跡調査の旅がベルツォーニによってはじめられた[35]。この旅の成果である「若きメムノン」は，シェリーの詩『オジマンディアース』によって迎えられた[36]。サドラーズ・ウエルズ劇場で力持ちの役者として有名だった男が[37]，アフリカ協会の関係者の手で大英博物館エジプト室の中心を形づくる人物となったのは，運命の単なるいたづらであったのだろうか。

ライプツィッヒ近くのナウムブルクに生まれた，カール・リヒャルト・レプシウスは，ブルクハルトの30年ほど後，ライプツィッヒとゲッティンゲンの各大学に学び，さらにベルリン大学へ進み，言語学・考古学を修め，1833年，シャンポリオンの成果をめぐる論争の中のパリに出た後，シャンポリオンの方法の正しさを確認して，ブンゼンの招きでイタリアへむかい，エジプト学に本格的に導かれた。彼のエジプトへの旅は，1842年プロシア王フリードリッヒ・ヴィルヘルムⅣ

世派遣の科学的遠征隊の指揮者として実現した[38]。彼の旅行中の書簡をまとめた旅行記は，1846年に出版され，その英訳本は，遠征の報告書（49年出版）と，彼の『エジプト人の年代記』の一部と，訳者レオナード・ホーナー自身のナイル地理学の論文がつけ加えられて出版されている（1853年）[39]。

レプシウスの報告書によれば，そのエジプト遠征は，アレクサンダー・フォン・フンボルトとブンゼンの推薦の下に，教育大臣アイヒホルンの提案として実現されたという。この調査隊の構成は，測量技師のエルブカム，製図・絵画家のヴァイデンバッハとフライ，画家のゲオルギ，それに，二人のイギリス人，画家のジョゼフ・ボノミ（1796－1878）――1824年にロバート・ヘイ（1799－1863）のエジプト旅行に従い，その後８年ほどエジプトに滞在し，エドワード・レインや，イギリスのエジプト学者として著名なジョン・ウィルキンソン（1797－1875）の旅を助けていた。ちなみに，彼は画家ジョン・マーチンの娘と結婚している[40]――と，建築家のジェイムズ・ワイルドであった[41]。古代エジプト文字を解読できる考古学者と，遺跡や地形の測量ができる測量技師，地図や設計図を描ける者や，遺跡を描き出せる画家と，すべてにそろった調査隊であることが分かる。とりわけ，ボノミという，すでに考古学的調査を経験していたイギリス人が参加していたことが注目される。すでに述べたように，ディレッタント協会は，遺跡を描かせるため画家を派遣していた。この方法は，グランド・ツアーに出かけた旅行者が，ポートレートや風景を描かせるために画家をともなって旅をしていた，という伝統につらなるものと考えられる――たとえば，ウィリアム・ベックフォードの如く[42]。そして，ボノミ自身，海軍少尉候補生として船に乗りこんでいたヘイの，エジプト旅行に従っていたのだから，この伝統に従っての旅をヘイとボノミのエジプト旅行にみることができる。このレプシウスの調査隊という，より専門的な調査の旅に，イギリス人のグランド・ツアーからディレッタント協会が作られたというコンテクストにつらなるものがからみついている，とみることができよう。そして，ベルツォーニからレプシウスの旅への展開が，このコンテクストにおける，専門化された旅の展開とみられよう――もちろん，専門化とは，旅の組織の専門化であるとともに，考古学の専門化であることは言うまでもない。

こうした変化とその意味を，旅行記を受けとめる側，ここではイギリスの読書人の側における動きを通じてみてみることにしよう。とくに，イギリスの考古学，好古趣味，歴史学といった歴史的な知の探求の世界について，その専門化過程を研究したフィリッパ・ルヴァインの分析によりながら，考えてみることにしよう[43]。

19世紀の歴史的学問の専門化は，好古趣味という，広い範囲の歴史的関心からの離脱，あるいは，それとの区別として明らかにされる。初期の歴史学者の中には[44]，――たとえば，ハラムのように――親近感をいだくものがあったが，大学教育を受け，大学で職を得た多くの政治史学者

にとって，好古趣味は関わりのないもの，あるいは，歴史学の侍女の如きものでしかなかった。これに対して考古学の方は，好古趣味者の側からはとくに区別されたものではなかったが，19世紀中期の中東の考古学者――ローリンソン，レイヤード，ロフトゥスら――は，好古趣味者とは呼ばれることはなかった。こうした考古学者は，30年代・40年代といった19世紀中期の，大学教育を受けず，具体的に発掘して過去の造形物の知に与るというグループを形成する。このような考古学者は，芸術家の美学的伝統，歴史学の訓練のゆきとどいた判断力，それに，少なからぬ言語学者の知識を集約させた知に与るものと言明されていた。

30年代から60年代にかけて，イギリスのローカルな考古学者や好古趣味者のグループは，各々，建築学や博物学に接近し，考古学と建築学，好古趣味と博物学の協会を作り，出版活動を行なうようになっていった。前者は，その土地の過去の出来事，建築，人物によって豊かにされた歴史的風景を明らかにし，過去の栄光と現在の知的勝利――その土地の尊厳を味わうという意味で――とを結びつける行為と考えられ，また後者は，トポグラフィーによって，宗教的要素を加味して予定調和的な，自然と人間の歴史を結びあわせる行為と考えられた。

こうした好古趣味と考古学のローカリズムに対して，19世紀半ばの歴史学は，ゲルマン的なものを，プロテスタンティズムの進展と重ねあわせて，ノルマンにけがされる以前のアングロ・サクソン文化と理念化し，中世イギリスに純粋な社会組織の理想を見，そこからローマ帝国の没落に歴史の教訓を学び，大英帝国への愛国心を明らかにしていた。教育面の独自性とともに，歴史学は，内容面での独自性をすでに獲得していたと考えることができる。

これに対し，考古学は，発掘という手法によって好古趣味から区別され，50年代より――ケンブリッジ大学の最初の教授マースデンらによって――過去の遺物の収集・分析・分類を行なう学問とされ，60年代のベイトマンや70年代のピートリーらによって，演繹法による学から科学的な帰納法による分析の学へと変容していった。しかし，考古学は，聖書との関わりを明らかにすることが求められることが多い。その点では，主にアングリカンであった多くの考古学者は充分に保守的であった。19世紀の後半，考古学では，聖書を例証し，説明し，確証する学問として，高等批評や地球の変化を明らかにする地質学に対し聖書の真実さを回復させる聖書考古学の立場が，また，美学的手法をとりつづけギリシア文明の栄光に与りつづける古典考古学の立場が，さらに，ローマ的遺物を専ら明らかにし，イギリス的なものの進歩発展のあとを示すイギリス考古学の立場が分化していった。こうして，19世紀後半，考古学は，古代の造形遺物や記念碑の，組織的研究，分類，年代順の配列を行なうものとみなされ，テクストと造形物の双方を過去の記録とみなす学問と受けとられた。この双方を示すものこそ碑文であり，人々は過去の記録として碑文をとくに好むようになり，そうした碑文に富む，ローマ期のイギリス，エジプト，聖書の地が人気の場所となった。

こうして，ベルツォーニの10年代――好古趣味の，手あたり次第の美しい宝物の収集家の時代――から，レプシウスの40－50年代――過去の事実の証拠の，組織的な収集の時代――への変化を，歴史的なものへの関心のコンテクストにおいてあとづけることができよう。

聖書地理学・考古学的調査者

次にとりあげるのは，30年代と50年代の二度にわたる旅行を行なったエドワード・ロビンソン（1794－1863）と，50年代の宣教師ジョサイアス・レズリー・ポーター（生没年不詳），そしてプロローグでふれた，エドワード・パーマーによる聖書地理学的な調査である。

ニュー・イングランドのサウジントンの，豊かな牧師――父は農場経営に才があり，牧師をつとめるかたわら，町で最も富裕なものとなっていた――の家に生れた，エドワード・ロビンソンは，ハミルトン・カレッジで言語学・ギリシア語を学び，アンドーヴァーではヘブライ語を教えるといった経歴の後，1826年から4年間，ゲッティンゲン，ハレ，ベルリンを中心にヨーロッパで学んだ。とくにヘブライ学者のゲゼニウス，教会史学者のネアンダーとの関わりは深かったようである。アメリカにもどって，聖書文学を教え，聖書のギリシア語・ヘブライ語を研究し，1837年，数年間の聖地への休暇旅行を条件にニュー・ヨークの統一神学校の聖書文学教授となった[45)]。こうして，1837年7月，中東旅行へと旅立っていった。ロビンソンの中東旅行は，直接的な派遣ではないが，統一神学校の承認の下に行なわれたものであることがわかる。この旅行は，彼の生徒であった，アラビア語学者で，ベイルートのアメリカ宣教師団の一員のイーライ・スミス（1815－1877）とともにねられた，と旅行記でロビンソンが語っている。このとき，スミスはアルメニア・ペルシアの旅から帰った所で，その経験とアラビア語の知識が，ロビンソンのパレスティナの聖書地理学的調査には，必要不可欠のものであったことが明らかにされている[46)]。また，この調査に，ドイツの地理学者，カール・リッターの協力が求められていたことが，旅行記には述べられている。ニュー・ヨークからイギリスを経てドイツに向った彼は，リッターがギリシア旅行で不在であったことを残念そうに述べている[47)]。この中東旅行を終えたロビンソンはベルリンにもどり，2ヶ年を過ごしているが，この間，ラウマーやランケといった著名な歴史学者と親しく交わるとともに，リッターやネアンダーのもとで旅行記を書きあげている[48)]。ロビンソンはその旅行記で，その範を，ブルクハルトの旅行記に置き，中東における調査を正確な日記として記してゆくと述べている[49)]。

このロビンソンの一回目の中東旅行では，同じくベルリンに学んだレプシウスの名が出て来なかったのだが，二回目の旅のはじめで，ロビンソンとレプシウスは出会うことになる。一回目と同様，休暇旅行を許され，1851年12月ニュー・ヨークを出発，ロンドンを経てベルリンにむかった。ここで，前回同様カール・リッターと親しく交わり，レプシウスやアレクサンダー・フォン・

フンボルトと会っている[50]。この二度目の旅でも，ベイルートのアメリカ宣教師団と同道の旅を行なっている。イーライ・スミス，W. M. トムソン，それに，スマイリー・ロブソンが彼の旅を助けてくれた。この旅では，聖地の歴史的地理学とか，歴史的トポグラフィーという言葉が使われている[51]。レプシウスやフンボルトやリッターとの出会いが示すものは，地理学・考古学の専門的な調査を強調することであると理解されるだろう。

ロビンソンの二回目の旅と同じ頃，イギリスの宣教師（アイルランド長老派），J. L. ポーターがダマスカスにおいて任務についており（1849－1854），ダマスカスを中心として各地を旅していた。伝道という仕事柄，土地の人々の言葉や習慣を学ぶと同時に，トポグラフィーと古代遺物について調べあげ，遺跡の場所を明らかにすることに従っていたと彼自身その旅行記の序文で述べている。先行するトポグラフィーとして，ブルクハルトの旅行記と，リッターの『パレスティナとシリア』に言及し，それに新しい知見を加えるものと，自らの旅の記述の意味を明らかにしている[52]。ロビンソンの旅との関わりについては，スマイリー・ロブソンと旅を共にしたことが共通するものと言うことができるだろう。1851年，ポーターはパルミラ（Palmyra）へ，ロブソンともども旅した[53]。翌年ロビンソンは，ダマスカスよりバアルベクを経てベイルートへの旅で，ロブソンと行動を共にしている[54]。そして，この二人の聖書トポグラファーは，ロビンソンの二度目の旅で，ダマスカスにおいて出会っている。ポーターは，ロブソンとともに，ロビンソンを都市の内外へと案内していた[55]。このような，共通の関心と旅の足跡から，この二人の旅が，宗教的なトポグラフィーの調査の旅として重なりあうものであることは疑いえない。

このような聖書地理学的調査の旅に，政府の軍事的な調査の影がちらつくのが，19世紀後期の中東旅行者，東洋言語学者エドワード・パーマーの，モーセ脱出の旅・カナーンへの旅の跡をたどるものである。二度にわたるパーマーの旅は，1868－9年と1869－70年の，ほぼ連続したシナイ半島とパレスティナの聖書地理学的な調査旅行であった。

一回目のシナイ半島の旅は，ピアス・バトラー牧師が提唱し，その遺志をついだヘンリー・ジェイムズ（1803－1877）――陸軍の工兵隊に入り，陸地測量部の部長となった人物，ピラミッドの測量で有名[56]――が，イギリス政府の承認のもとに，陸地測量部をともなった調査という形をとりつけた，シナイ調査遠征隊の一員としての旅であった。遠征隊は，工兵隊大尉チャールズ・ウィルソンとヘンリー・スペンサー・パーマーを長とし，その下に同じ部隊の下士官4名，すでにシナイ調査を経験していた F. W. ホランド，博物学的調査担当のワイアット，それに，シナイ半島の各地の名と伝承を調べ，岩に刻まれた文字のコピーと解読を担当するパーマー自身という構成であった。この調査の主目的は，聖書に書かれたモーセの話に示されている各々の場を明らかにし，その聖なる歴史を聖書地理学の発見に結びつけることである，とパーマーは述べており，さらに，とくに重要な問は，どれが真のシナイ山であるかを明らかにするというものであったと

している[57]。この遠征隊の成果は，『シナイ半島の陸地測量』として出版されている。軍事的な調査と，聖書地理学や博物学の調査がドッキングし，学術的調査への政府の介入が見てとれる。1866年にオープンした公文書保存所（パブリック・レコード・オフィス）——初代の副管理官（デピューティ・キーパー）は，フランシス・パルグレイヴ——，1882年の歴史的記念物保護法とともに[58]，19世紀後期における，歴史的な学問への政府の介入の事例の一つとしてあげることができよう。

パーマーの二回目の旅は，チャールズ・ティアウィット・ドレイクをともなっての，パレスティナ踏査基金（エクスプローレイション・ファンド）の委託による調査旅行であった[59]。中東史家のシーライトによれば，この基金は，1865年に，科学者による正統な宗教への攻撃を打ち破るために設立されたものである[60]ということだが，パールマンによれば，ヴィクトリア女王の後援により，ヨーク大主教，考古学者のヘンリー・ローリンソン，聖書地理学者で神学者のアーサー・スタンリー等をメンバーとする，聖書の諸問題をその土地で明らかにする科学的調査を促進することを目的とするものであったという[61]。同行のドレイクは，博物学的調査と，動・植物の標本を作るために，ケンブリッジ大学より任命された——パーマーもケンブリッジ大学の特別研究員であった[62]。この調査も，前回同様，博物学者と言語学者による聖書地理学的調査で，古代イスラエル人のカナーンへの旅の全過程を徒歩で調べあげるというものであった。この調査では軍部との協同作業とはならなかったが，すでに述べたように，パーマーは，1882年，スパイ活動に利用され命をおとしており，東方調査への政治の介入は，パーマーを通して明らかになっていったと言うことができよう。

探険家，その他

パーマーがシナイ半島で行方不明になったとき，イギリスの外務省は，当時トリエステ領事であったリチャード・フランシス・バートンに打電し，生きていることもあり得るので捜索するよう求めていた。一報を得てバートンは戦闘を考慮し，カイロへ発った。砲艦を求められた外務省は急ぎ200人の兵士をチャールズ・ウォレン——彼もまた，パレスティナ踏査基金による，イェルサレムでの発掘調査に従事していた——の指揮のもとにシナイへむかわせ，ウォレンはパーマーの死を確かめるに至る[63]。この，イギリスの，エジプト軍事占拠中の出来事に関わったバートンについて，その中東との関わり——中東旅行——を中心に，少しみてみることにしよう。

人類学者——彼は，ロンドンの人類学協会の設立に際して,ジェイムズ・ハントを助けている[64]——，軍人——東インド会社のインド駐留軍——，考古学者・地理学者，エロティカの翻訳者で言語修得の達人，そして剣の達人として知られるバートンが，旅の歴史に登場するのは，19世紀中期の探険家の一人としてである。それは，王立地理学協会の支持のもとに行なわれ，旅の成功と，旅の謎によって，人々に知られることになった。

王立地理学協会は，1827年ロンドンにできたローリー・トラヴェラーズ・クラブが母体となっ

て，ジョン・バローによって，1830年６月に設立された協会で，その評議員にはアフリカ協会のリークとハミルトンがなっており，弱体化したアフリカ協会は1831年に併合されていた[65]。この，調査・探険を支援する組織に対し，インド軍で調査活動に従事し，人類学的なものに興味を持っていたバートンは，禁じられた都市・メッカ（Mekka／Meccah，今はMecca／Makkah）とメディナ（Medina／Madinah）への踏査旅行を計画して接近し，協会はこれを支持。東インド会社から休暇を得，協会より資金を約束され，1843年４月，メッカにむけて出発した。11月にはカイロにもどり，それからボンベイでの11ヶ月の間に旅行記を書きあげている[66]。探険家としてのバートンは，ここに禁じられた世界の踏破者として誕生し，王立地理学協会の支持のもと東アフリカへ，ナイルの源流を求める旅へと進んでいった。この東アフリカ旅行には，外務省より１千ポンドが，モンクトン・ミルンズの助力によって，バートンに与えられた[67]。

同行のスピークによって，ヴィクトリア湖が発見され，ナイル源流発見論争の場に引きこまれたバートンは，1860年代を，西アフリカ，フェルナンド・ポーと，南米ブラジルのサントス領事としてすごし，1866年，ダービイ伯，エドワード・スタンリー外務大臣によってダマスカス領事に任ぜられ，再び中東に現われることになる。この領事時代に，パーマーとドレイクと出会い，共に旅を行なっている。ドレイクとの共著『未探査のシリア』は，このときの旅行記である[68]。パーマーとドレイクは，シナイ・パレスティナ旅行を終えて，バートンと出会ったことになる。外務省とパーマーとバートンの関わりは，この聖書地理学・考古学やトポグラフィカルな調査に，特別な意味あいを持たせていることが理解されよう。

このあとバートンは，1872年から死ぬまで，トリエステ領事を務めている。彼の最後の中東調査は，この領事時代のことで，アラビア半島北西のつけ根部分，古くからミディアンと呼ばれた古代の鉱山地域に，金鉱探しにバートンは赴いている。そのために，エジプトの副王（ヘディーブ），イスマイールに謁見し，費用支払いの約束のもと，二度にわたって――1877年から1878年――古代遺跡と地質調査を行なった。金鉱さがしは失敗し――但し，後にここから金鉱が発見されている――，ヘディーブから調査費用の支払いを拒否され，中東よりバートンは敗退を余儀なくされた[69]。

軍人としての調査から人類学的調査が生まれ，時代の探険家の姿が調査者にかぶせられ，偉業を成し遂げた冒険者としてみられたバートンが，19世紀後期，失意の外交官として考古学に傾斜し，専門的な調査を行ない，さらには実利を求め得る地質学的な調査へとむかっていったことを，彼の中東旅行とその旅行記の展開からよみとることができる。もちろん，彼が『アラビアン・ナイト』の翻訳者として，東方の性の技芸の専門家として，東方イメージの提供者であったことはすでに述べた。アフリカ協会をついだ王立地理学協会に支援された旅は，ブルクハルトのあとを追う旅であり，その伝統をひきつぐものであったし，外交官としての旅は，ブルクハルトの旅に刺激された旅――ポーターによって行なわれたものであるし，また，次の節で明らかにされる旅

でもある――に重なるものであったし，最後には，イギリスのエジプト占拠に重なる旅であったと，バートンの旅は理解されよう。そして，彼の旅には，常に，イギリスから，そして，ヨーロッパから脱出しようという意図があったことを，その旅行記は明らかにしている。子供時代に，イギリスが，家庭教師に代表される，打擲を与える，罰の世界であり，それからの脱出が解放であったように，オックスフォードをぬけ出してインドへむかい，イギリスに居つくことなくメッカへむかい，トリエステでの「文明化されたヨーロッパの牢獄に似た生活からぬけ出し」ミディアンにむかっていた[70]。この旅の形である脱出のテーマについては，後でふれることにしよう。

調査を目的とした旅行者の最後に，ウィリアム・ギフォード・パルグレイヴ（1826－1888）の旅をとりあげよう。後年，マニラの領事，ソフィアとバンコックの総領事，ウルグアイの公使と外交官を歴任したパルグレイヴの人生は，その中東との関わりにおいて謎めいたものであった[71]。公文書保存所の管理官で改宗ユダヤ人のフランシス・パルグレイヴを父にもち，父の友人，オックスフォード運動のフランシス・ウィリアム・ニューマン，つまり，「神が，その神聖なる監督のもとに，啓示を保存し，また解釈するという務めを託したもうた（教会）」を受け入れ，その無謬性が，神の「大いなる真実を全く虚偽と化すかにみえる」この世の腐敗と荒涼なる光景に対して，宗教を保存し，思考の自由の行き過ぎをはばむ「有効な手立て」と説き[72]，多くのオックスフォードの人々をひきつけていたニューマンが，ローマ教会に改宗した時（1845年）に，トリニティ・カレッジに席を置いていたパルグレイヴはオックスフォードを離れ，1847年，士官学校の生徒という立場でインド軍に参加し，2年後軍を退くまでの間に，マドラスのイエズス会に入会し，退役後神学校に入り，その後，ローマのイエズス会の神学校で学んだ[73]。1856年よりシリアのイエズス会の伝道師となり，ベイルート付近やハウラン地方での教育，伝道に従事し，中東の舞台に登場する。彼のアラビア旅行記は，1860年の，ドルーズ派とマロン派の戦闘で苦境に立つシリアでの伝道活動への支援をたのむべくヨーロッパで行なったキャンペーンの最中，イエズス会が計画したアラビア調査に，フランスのナポレオンⅢ世が同調，着手したスエズ運河の背後の不安であるイスラーム教徒のワッハーブ派の動きと，その対抗勢力――これについては後で詳しく述べることになろう――についての情報を入手すべく，パルグレイヴに要請――資金は1万フランとも6千フランとも言われている――，その結果行なわれた旅を記述したものである[74]。従って，トポグラフィーと政治情勢の調査を主目的としたものであることがわかる。旅は1862年にはじめられ，64年ドイツの修道院で旅行記はまとめられた。その直後，ヴァチカンのアラビア伝道中止の報を得て，ローマ教会に失望し，65年ベルリンでカトリック放棄を宣言し，イギリス外務省から外交官への道を与えられるに至っている[75]。こうした彼の変心の節々は謎めいたままとなっている。インド軍―中東―外交官と，形の上では類似しているものの，バートンの生き方とは相反し，バートンが常にパルグレイヴに不信の念をいだきつづけていたのも理解し得ること

であろう[76]。しかし，バートンが，古くからの謎の地への冒険者として人気を高めていたように，スパイとして活動する謎の人物の，アラビアの，禁ぜられた土地の政治的な動きの報告には，物語にみられる冒険者の姿がだぶると言うことができよう。

3．グランド・ツアーの延長

i　旅の変化

エジプトで，アフリカ協会派遣の調査者，ブルクハルトと出合ったレイとスメルトの旅は，グランド・ツアーという枠組みで行なわれた旅であった。11才年上のスメルトの役割は，レイの個人教師というべきものであったろうと推測される――後に教区牧師となったこと以外は不明の人物であるが。もちろん，レイ自身が明らかにしたように，彼らの旅は，古典的なグランド・ツアーを空間的に延長させざるを得なくなった旅であった。その原因がナポレオン戦争による政治情勢であったことはすでに述べた。

ベルツォーニをイギリスへ追い，ブルクハルトを結局はイギリスへと送ったのも，ナポレオン戦争であった。そのナポレオン戦争が，グランド・ツアーを変質させたと言われている。

> （ヨーロッパにおける）種々の交流は断たれ，消失を強いられ，イギリス外交官はもどされ，修道院を訪問したり，アカデミーに出席したり，王室に拝謁したり，宮中や宗教的な会合での儀式を見つめる，といった古き活動はとりやめられた。ヨーロッパは，より近づきがたくなり，より理解しがたくなり，敵対的になった。そして，古い習慣のグランド・ツアーは，こうした変化の犠牲となった[77]。

とは言え，ナポレオン戦争によって，初めてグランド・ツアーが空間的に延長されたと言うわけではない。1730年代初めには，ラドナー伯が東欧・ギリシア・小アジアを，同じ30年代末には，サンドウィッチ伯がギリシア・小アジア・エジプトを旅していた。そうした旅が，ウッドやステュアートの旅を導いていったことは，すでに述べておいた通りである。グランド・ツアーを延長した旅がディレッタント協会の旅を生み出し，更にはアフリカ協会による派遣の旅を一方で生み出したように，もう一方では，ディレッタント協会員の調査旅行を生んだ旅が，レイのような調査の方にひきつけられたグランド・ツアーを生み出した，と整理されるのではなかろうか。たとえば，1835年に，ギリシア・小アジア・シリア（特にパルミラ・バアルベク）を旅したチャールズ・アディソン（？－1866）は，ウッドとドーキンズが描写したパルミラが自分を遺跡にひき寄せた

と明らかにしている[78]。

しかし，18世紀から19世紀の間，イギリス人の，そして，多くのヨーロッパ人の旅は変化していったと見られよう。18世紀前半の貴族の若者の旅は，後半には，小規模ながら，女性達や年配者も参加するようになったし，中流階級の人々も行なうようになっていったと言われている[79]。そして，18世紀は，サミュエル・ジョンソンに代表される，イギリス人の国内旅行（ウェールズやスコットランド旅行）を生み出していった時代でもあった[80]。ジョンソン自身は，1773－4年にウェールズ・スコットランドを旅している。メランコリックな風景にひきつけられ，崇高美を求めていった時代の産物としての，ロマンティシズムの美学の影響下に，ウェールズ旅行は人々をひきつけていったこと，さらに，スコットランド高地が，この美的空間として認められていったことは良く知られている[81]。こうした旅を行なった者の一人に，アフリカ協会設立者のジョゼフ・バンクスが居たことは，特筆しておいてよいだろう。そして，この美学から東洋趣味（オリエンタリズム）の世界がひろがっていったことは言うまでもない。

18世紀の旅の変化が，こうした美学的要素を含んでいた反面，余暇の旅の展開が指摘されている。上流の，知識人の教養旅行に対して，中流層の余暇旅行が成立してきたと言われている[82]。この変化は，19世紀に入って，トーマス・クック（1808－1892）によって，パック・ツアーという形へと導かれる。1848年の初のパック・ツアーから，51年のロンドン万博ツアーへ，さらに，68年には中東のパック・ツアーへと，クックの旅行社は手をひろげている[83]。さらに，クックは，出版社ジョン・マレーと手を結び，観光ガイド・ブックを出版させている。考古学者ジョン・ウィルキンソン（1797－1875）による『現代エジプトとテーベ』は，その一冊で，その記述は詳細をきわめている[84]。しかし，こうしたパック・ツアーの旅行者に対して，教養旅行の中東旅行者の一人，アメリア・エドワーズ（1831－1892）はひややかな眼差しを送っており[85]，自由に旅する者の優越感を認めることができよう。とは言え，文明化は確実に中東の旅を変える。アメリカ人の旅行家，ジョン・ロイド・スティーヴンズ（1805－1852）は，鉄道の完成で，「砂漠の旅の興奮と驚異は終る」と1835年の旅で予測していた[86]。こうした旅の変化が，古き伝統の教養旅行，グランド・ツアーの延長の旅を行なう者にとって，悲しむべきものであったことがわかる。そうした，伝統の中東旅行者を，これからみてゆくことにしよう。

ii　中東教養旅行の情報網

19世紀の中東調査者にとって，ヨーハン・ブルクハルトの記述は重視すべきものであったようだ。たとえば，ダマスカスの南東にひろがるハウラン地方（Hauran）を調べていたポーターにとっては彼のハウラン記述が，ロビンソンにとってはエドムの地とペトラの記述が，そして，メッカ

記述はバートンにとって長い引用を行なう必要を感じさせるほどに，重要なものとみられていた。もちろん，訂正の必要のないものとして，ブルクハルトの記述を評価するという態度をとっているわけではない。

彼ら調査者がブルクハルトと距離を置いているのは，ブルクハルトの旅から時間的な距離——それは専門化をも意味する旅の成熟とも言えようが——を持っているからと考えられる。それに対して，初期の教養旅行者達は，もっと直接的に，ブルクハルトと関わり，旅の情報を得ていた——彼は1817年10月にカイロで死亡している。

1816年から18年にかけて中東を旅した，二人のイギリス人，チャールズ・レオナード・アービィ（1789－1845）とジェイムズ・マングルズ（1786－1867）は，死の直前のブルクハルトとカイロで——17年9月——出会っている。ともに退役海軍大佐の彼らは，すでに，総領事ヘンリー・ソールトの秘書，ヘンリー・ウィリアム・ビーチイ（？－1870頃）とともにベルツォーニのアブ・シンベル大神殿——これを「発見」したのもブルクハルトであった——発掘に加わってエジプト・ヌビアの旅を行ない[87]，シリアへ旅立とうとして，その詳しい情報を，「アフリカ協会のため旅をし，レイの旅行記に言及されている，シェイク・イブラヒム」，つまりヨーハン・ブルクハルトから得ることとなった。またソールトからは，シリア各地の代理人やアレッポ領事，ジョン・バーカー（1771－1849）——1803年より領事，29年にはソールトの後任総領事となっている——宛の紹介状を得て，シリア・パレスティナの旅に出発して行った[88]。アレッポ（Aleppo）では，バーカーより，後にアフリカ協会会員となる，バイロンの友人のウィリアム・ジョン・バンクス（1787－1855）に紹介され[89]，さらに，ペトラ行では，このバンクスと，二度目の中東旅行中のレイの四人が同道することとなる[90]。人々の記憶の中に眠っていたペトラが，ブルクハルトによって起こされ，彼と接触した人々を誘引していったとみられよう。

ヘンリー・ソールトとウィリアム・バンクスは，1818年上エジプトの旅を共にしているのだが，翌年，新たにフランスよりカイロに来たリナンを画家として上エジプト旅行にともなった[91]。このリナンが，中期の中東旅行者の情報源となってゆく。

ルイ・モーリス・アドルフ・リナン・ド・ベルフォン（1799－1883）は，フランス海軍軍人としてカナダ・アメリカ海岸調査に従事した後，海軍を退役し，ド・フォルバン伯に従ってギリシア・シリア・パレスティナ・エジプトの旅を行ない，1818年にカイロに到着，83年の死まで中東に住むことになった。ソールトとの関係からと思われるが，1827年には，アフリカ協会からの依頼でスーダン調査を行なっている[92]。

エドムの都ペトラへは，リナンは，アレサンドル・ド・ラボルド伯の息子，レオン（1807－1869）の案内人として行っている——1828年のことである[93]。この旅の情報は，カイロで，リナンからアメリカ人のスティーヴンズに伝えられ，スティーヴンズはそれに従って旅を行なった（1836年）。

長年カイロに住み，エジプト政府に仕え，リナン・パシャと呼ばれるようになる彼は，多くの欧米人旅行者と出会ったわけであるが，その中にはさらに，スコットランドの貴族で旅行家のリンゼイ卿（アレクサンダー・ウィリアム・クロフォード，1812－1880）がいた。1836年12月カイロでリンゼイ卿は，「ラボルドをともなってペトラ（Petra）を訪れ，メロエ（Meroe）の廃墟となった都を発見した，フランス人画家リナン」と会ったと書いている[94]。ブルクハルトの軌跡は，こうしてリナンにひきつがれ，19世紀中期の旅行者達に伝えられていったことがわかる。こうした

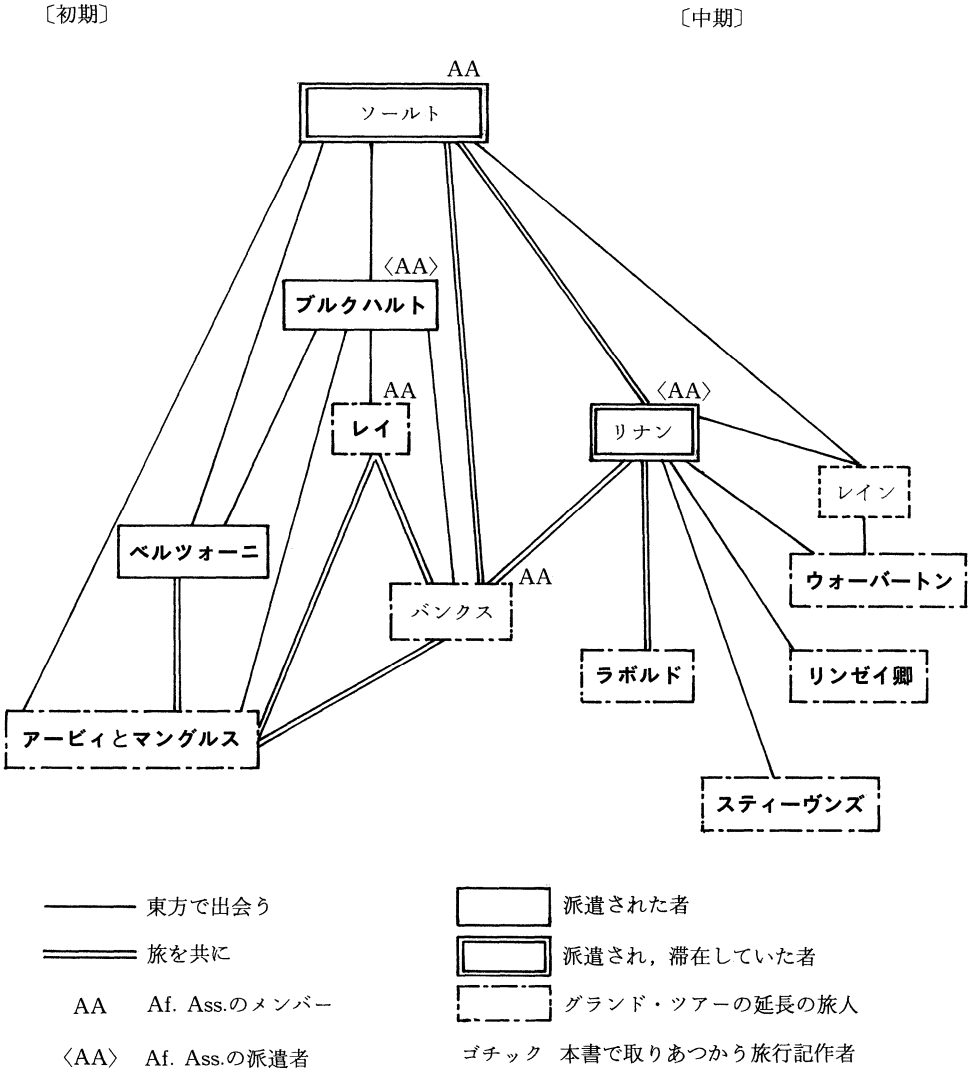


表 1　19世紀初期・中期の中東旅行者の情報網

関係を［表１］のように整理しておくことにしよう――この表の内，レインについては，アラビアン・ナイトの都市・カイロの民族誌家（エスノグラファー）としてすでに紹介しておいた。ウォーバートンについては，次に述べる。

iii　脱出者

最近の，18・9世紀文学の研究者の研究をみてみると，この時代の旅のコンテクスト，あるいは，旅行者が自らの立場を明らかにするときに依って立つ基盤といったものが明らかになるように思われる。

ロマン派の教養小説である，ヘルダーリンの『ヒュペーリオン』は，幼年時代の楽園における自己統一が失われ，それを求めて，ギリシアにおける異民族支配下の苦難，分裂的な生のドイツ，そして，自己と自然の統一的なギリシアへの回帰という旅としての人生を描いたものとみられている[95]。人の成長における，分裂・分離，移行，そして回帰，というイニシエイションのパターンを，この描かれた旅においてみることができる。教養旅行は，語られたものの中で，「人生は旅」というテーマに結びつけられていたように思われる。

「人生は旅」という表現は，聖書における次の言葉に，その根をもとめられることが多い。

> （アブラハムの神への信仰をいだく人はみな），まだ約束のものは受けていなかったが，はるかにそれを望み見て喜び，そして，地上では旅人であり寄留者である――異邦人（ストレンジャーズ）であり巡礼（ピルグリムズ）である――ことを，自ら言いあらわした。そう言いあらわすことによって，彼らがふるさとを求めていることを示している[96]。

この世での苦難・苦悩を，堪えるに意味のあるものとして，その人生を描き出すとき，その表現は，人生が本来自らのものであるべきものを求める巡礼であり旅である，という表現をとることになる。この表現は，キリスト教精神による自伝において――例えば，アウグスティヌス――，古き自己の死と再生という表現をともないつつ，精神の旅を経て信仰によって真の自己を得る，という形をとっていたことが明らかにされている[97]。また，イギリスのジョージァンの小説の主人公にあっては，「その生まれながらの状況に満足せず，真実の新たな啓示を育くむ異なった環境における，自分自身や世界や，存在の究極の意味を求める好奇心に動かされた」旅をして，その人生が描かれていると指摘されている[98]。そして，キーツによって，良き知を得るために，必要なものとしての苦難が明らかにされ，その経験として人生が旅であると描かれることになり，さらには，楽園喪失者は，秘密の知への参入者として描き出され，苦難をしのぐことで，詩人と

して神の如く視る力を得るに至る人生が描き出されることとなる[99]。こうして，未だ知らざるもの，表現されざるものを求めて，苦難の中を旅する，巡礼＝芸術家という表現がうかびあがってくる。楽園喪失者，分裂の中の疎外者は，より高い次元での統合者となるべく，苦難の道を歩むというロマン派の世界が現れてくる，と言えるであろう。そうしたロマン派の表現の中にあって，たとえばワーズワースは，実際の場での旅を表しつつ，それを，隠喩的な旅人によって歩まれる象徴的な風景へと変形したとみられている。放浪の芸術家は，意味づけられた象徴の風景の中を旅する者となる[100]。遠くにありながらかつ常に自らに現前する世界を求めること，そうした放浪の希求者がロマンティックな人物とみられている。そして，彼らは，そのような世界へと自らの場から脱出する。時間の内では中世へと，空間の内ではオリエントへと。それは，もともと自分のものであったもの，それから切り離されてしまっているものを希求することを意識させる[101]。ロマンティシストの時代の，脱出の旅は，こうしたコンテクストを作っていることが理解されよう。

そこで，三人の中東旅行者の，脱出としての旅立ちの言をみてみることにしよう。

法律家で銀行家を父に持ち，イートン，トリニティ（ケンブリッジ）——そこでテニスンやサッカレイと知りあう——と進み，ロンドンで法律を学んでいた，アレクサンダー・ウィリアム・キングレイク（1809－1891）は，1834－5年に中東旅行を行なっている。その旅行記の中で，キングレイクは，ヨルダン川の岸辺に立ち，イギリスを脱出し東方を旅することの意味について次のように述べている。

> （イギリスに生まれた者には），社会の退屈な習慣を嫌う時，飼い馴らされた人々を好きになれぬ時，教会の会衆用の腰掛にすわっていられぬ時，先人の意見を排撃し，傲然と真実を過誤から切り離す時，つまりは，疑問を示し，嘲弄し，不平を口にする，という時，真の芸術作品（とされるもの）や，我々の最も大事にされている習慣を取るにたらぬものと公言する時が，こようというものだ。……この，ほほえんでいるが如きイギリスに居て，君は，自分の道をその山の暗い側へと向けて，未だ区分されぬ大地が自分の気性に合っていると感ずるが故に，目がくらむような岩山を登り，霧と雲とを仲間にすることに狂喜し，力を得てゆく嵐の様をながめ，自分の馬の勇気を広く荒涼とした丘陵地に証す，という自分に気づく。そうしてしばし，自ら巡っている土地の如く，自由でレッテルをはられずにいられるのだ。しかし，文明は，その投げなわを投じようと待ち構えているのだ。君は確かに（文明によって）包囲されよう。そして，遅かれ早かれ，単なる有用さの状態へとおとしめられよう。君の灰色の山は，念入りに，大小種々の広さの田畑に分けられよう。そして君は，意地で自らの鞍に腰をおろしていようと，つかまってしまうのだ。食んでいた草からひき離される仔馬の如く，君は，その（国内の）旅からひき離されて，訓練を受け，

> 試され，調和させられ，駆りたてられる。ところが，（我々には），まずは大陸への旅があり，そして，東方旅行へのむら気な希求となるのだ。イギリスの丘陵地や荒野は，もはや，君をつなぎとめることはできない。大またの歩みで，君は，この自由な，狭く小さな土地をとび出す。……（このヨルダン川の向こうには）慰めがある——あわれで，愛すべき，中年になった，称賛されるべき，洗練され，衒学的で，勤勉な女家庭教師ヨーロッパにうんざりしてしまい，離れたがっている人にとって，健康で，安らぎで，頼りとなる力がある[102]。

若い時代の国内の旅では逃れることのできない，文明の軛から脱出できるのは東方旅行によってなのだと明らかにされている。

キングレイクが呼びかけているのは，イートン時代からの友人，アイリッシュのバーソロミユー・エリオット・ウォーバートン（1810－1852）である。彼らは，テニスンやサッカレイ，ディケンズらとルーシー・ダフ＝ゴードン（1821－1869）のサロンに集っていた仲間であった[103]。その呼びかけに答えて，ウォーバートンは，1843年に中東に出かけている。「ひととき，人ごみの部屋をぬけ出して，自由に，ひろびろとした東方で，呼吸をすべく」旅をした彼は，逃がれ出たヨーロッパ——とくにはイギリス——と，到着した中東とを次のように対比している。

ヨーロッパ社会は人をあきあきさせ，週日の競争は休暇を必要とし，荒々しい気候は芳しい空気を必要とするほどに肺を荒し，愛憎や野心やつかの間の激情が生活を波立たせている。そうした世界から逃れ，ナイルの世界へ来れ，と語る。ここには北国の嵐のかわりに，曇ることのない日ざしと，芳香の風，星と三日月の輝く夜があり，得失のお金も，喜びや悲しみで心みだされる手紙もなく，知った言葉に心をわずらわされることもなく，修道院の隠退独居の生活がある。

> 君が目のあたりにする，ここの住人達は，その外見や習慣や希望や不安が，君のものとはあまりに異っているので，君は，抽象的に人をながめることができ，偏見なしに現象としての彼を研究することができる。君は過去の沈黙の領域にむかって，ヨーロッパから遠のけば遠のくほど，過去のうちに生きることになる。君が船ですべってゆくナイルや，砂漠や森や，君のすう空気は静穏だ。……遂には，我々の島国（生まれの特徴である）落着きのなささえやわらげられて，周囲の万物の平穏さの中にとけ込んでゆく。

だから，人にはいつか，「当惑する享楽，複雑な贅沢，多様な関心をともなうヨーロッパの熱病のような生活を，砂漠とナイルでの生活の沈黙と単純さと自由とに変えてみるよう勧められる」日が来ようというものだ[104]。

こうした，逃れ出すべき，わずらわしさの，喧噪の文明を，キングレイクやウォーバートンとモンクトン・ミルンズを共通の友とするバートンは[105]，牢獄のようだと述べていた[106]。

そして，二人の女性が，ウォーバートンの云う「肺を荒らす気候」から脱出している。一人は，キングレイクとウォーバートンの友人，ダフ＝ゴードン夫人であり，もう一人は，後にエジプト学の発展に貢献した，アメリア・エドワーズである。結核にかかったダフ＝ゴードンは，転地療養のため，まず1861年に南アフリカのケープタウンへ，更に1862年にはエジプトへおもむき，短期の帰国を除き，その死までエジプトにとどまった[107]。エドワーズの方は，「雨をさけるために」たまたまエジプトを選んだと述べている[108]。雨に降りこめられ，ぬれそぼつのはかなわないから，乾燥の地に逃れ出た，というところであろう。ともかく，この二人も，脱出者ということでは共通しよう。そこで，この脱出ということの意味を，書かれたもののコンテクストに置くことで明らかにすることにしよう。

17・8世紀のヨーロッパ人の旅も，その一つのタイプが，脱出の旅であった，と旅行文学の研究者パーシー・アダムズは指摘している。法律上の訴訟問題，家族問題，宗教上の迫害や不健康な気候を逃れて，より安全で幸福で健康な土地を求める旅が行なわれてきた[109]。ジョージ・サンディズは不幸な結婚とそれにつづく訴訟問題から逃れてヨーロッパ・中東の旅に出たし，クロード・ル・ボーはパリでのギャンブル負債の支払に音をあげた父親に追い出されてアメリカへ旅立っていた[110]。後年ローザンヌで，「都雅な，機知に富んだ，哲学的な案内人として，ローマ帝国中を読者に案内する」旅行文学の作品[111]，『ローマ帝国衰亡史』を書いたギボンは，16才で，ローマ・カトリックに改宗したために，その地に父親によって追放されていた[112]。

19世紀の中東の旅行者は，その脱出行を意味づけるにあたって，二つの極としての東と西を対比し，自らをその間を移行するものとしていた。それは，ロマンティシズムの研究者によって指摘されているように，人生を，二つの極の間の振幅と考え，それを実際に二つの地理学的な対立点の間の放浪・希求として実行していたロマン派の人々――バイロンやネルヴァル[113]――の思考に一致しているとみられよう。

牢獄の如き世界からの脱出というバートンの表現は，次のようなコンテクストに置かれよう。

芸術家達が明らかにする，自らが置かれた牢獄という状態は，心が実在性や外部世界からさえぎられ，自己の外の世界へととび出し外部世界に接触しようとする欲望を明らかにするものと説明されている[114]。ワーズワースとコールリッジは，牢獄に捕われた者を歌い，社会から隔離された人間という考えに対決し，その隔離を正当化する因習的な知識を攻撃して，自然の治癒力のある環境で自由を許されれば，社会に適さぬ者も良くなると歌うと指摘されている。その自然の中では，陽の色彩と，美しい形と，芳香の風がきわだつ[115]。それらは，中東の旅行者が感じとる，自由な自然に重なる。しかし，中東の自然が常に希求すべき自然とは限らない。このことは後に

明らかになるであろう。

さて，「肺を荒らす気候」と表現された，その荒らされた肺の方は，どのような表現の中に置かれ得るのであろうか。

雲と霧の重苦しい天気は，人の視野をさえぎるものとして，視野に制限を与えるものとして，サミュエル・ジョンソンの詩に現れている。それ故に高所からのパノラミックな眺望は人の視力の限界の中で安定ではなく，神の視野の無限性とおりあうものとなってこそその視力のもとに安定する[116)]。気象は，人を，その宗教的高みへとひきあげさせる，あるいは，そうした高みの表現を必要とすると言うことができよう。もちろん，このロマンティックなコンテクストにおいて。コールリッジは，雨が陽光の中の眺望を暗くし，不明瞭なものとすることを強調し，人をしてその理性を狂わしめ，その中で理性にとどまるものを狂人とする人々を明らかにする[117)]。そこで，そうした狂気からの救出，回復が求められるという表現が期待されよう。この表現は，天候の相においてではなく，心の健康と旅との関わりという形で明らかにされる。

病気とその治癒の言説は，次のようなコンテクストを作っている。病気は，まず，心の病いとして，停滞，不活動・怠惰といった悪徳と表出される[118)]。この状態は，分裂，分離，孤立として表現され，堕落と言表される[119)]。つまり，自己との本能的な合一状態である原初の幸福，心と自然の原初の統一の喪失，そうした健全なる状態の分裂が，悪徳であり病いであると表現される[120)]。自己自身の分裂，他者からの分離，そして，環境からの，自然からの分離が，病いとしての断片化，疎隔，疎外の状態を作り，知る自己と断片化，区分化された対象とを分離し，思考する自己が人間の自然な基層（本能，欲望，強制）や活動から切り離されて，心を沈滞させ，不活発な身体を生む，と言表されることになる[121)]。

こうした病いの治癒は，活動という徳である旅によって，パラダイスを，つまりは，喪失や分裂を無化し昇華する自然との合一を，自己との合一，同朋との交流，異なった世界，敵対的な外界とのふれあいを回復する道を希求する，という表現において与えられる[122)]。旅によって停滞，沈滞，不活動が打ち破られ，精神の巡礼という表現をとりつつ，宗教的，精神的な高みへと導かれる，と考えられているとみて良かろう。そして，このコンテクストに，結核と，その治療としての転地の旅という表現が置かれ意味づけられることになる。

結核についての言説はソンタグが明らかにしているものが著名である。彼女によれば，19世紀において，ロマン派の人々によって，結核は，自己の本性を抑圧することにより，また，喪失した故郷への憧憬と欲求不満からかかるものとされ，ヴァイタリティや生命力に欠けた，繊細で受け身の人間，悲しみの無力さに置かれた人間，生命力と完璧な自然性を実現できぬ人間のかかる病いと言表されていた。ときに，意識に悪しき攪乱を与えるものともされていた。それ故に，病人は，社会から切り離されることになる[123)]。結核は，分離，喪失，不活動の病い，という言説が

整理されよう。そして，その死は，人を精神の高みへとひきあげるものと表現される。結核は生をせきたて，肉体を消耗させ，魂を霊化する。堕落した人には救済となり，有徳な人にはさらに高い道徳性を与える，と語られる[124]。

> 結核は崩壊であり，発熱であり，肉体の軟化である。それは液体性の病気である――肉体は粘液と化し，痰となり，ついには血ともなる――それは空気の，よりよい空気を必要とする病気でもある[125]。

また，結核は湿潤性の病気とされ，湿っぽい都会，抑圧的な都会の病気とされていた。従って，病人には，乾燥した空気が必要とされ，ロマンティックな風景の高地や砂漠へ転地することが必要とされた。結核患者は，こうして，都会を拒否し，日常生活の外へ，流刑者の如く送り出される[126]。湿潤の天候からの，つまりは雨からの脱出（エドワード）が，結核患者の転地療養の理由づけに一致する，というところか。そして，結核の転地療養は，有徳の旅となる。ダフ＝ゴードンは，その定型に従うかの如く，心あたたまる人々との交流を描き出す。受難者のように，家族との日常の安らかな生活を放棄し，遺跡紹介者という好奇心を満たす役割を放棄しつつ，精神の高みへと導かれた者であるかの如く。

脱出が，分裂，区分，疎隔からの脱出で，旅という形をとって実行されると，そこには，有徳の，本来の自己との合一の，自らの環境とは異なった世界との交流の，「自由」な状態が得られる，とロマン派の詩人も，哲学者も，そして，この時代の旅人も主張する[127]。そこには，想像の，そして，客観的な，トポグラフィーが提示されることになる。世界に，自然に近づき，本来の自己を取りもどした，世界を視る者の姿が表出され，その視られた世界が記述される，ということが求められ，期待されよう。

4．旅の軌跡

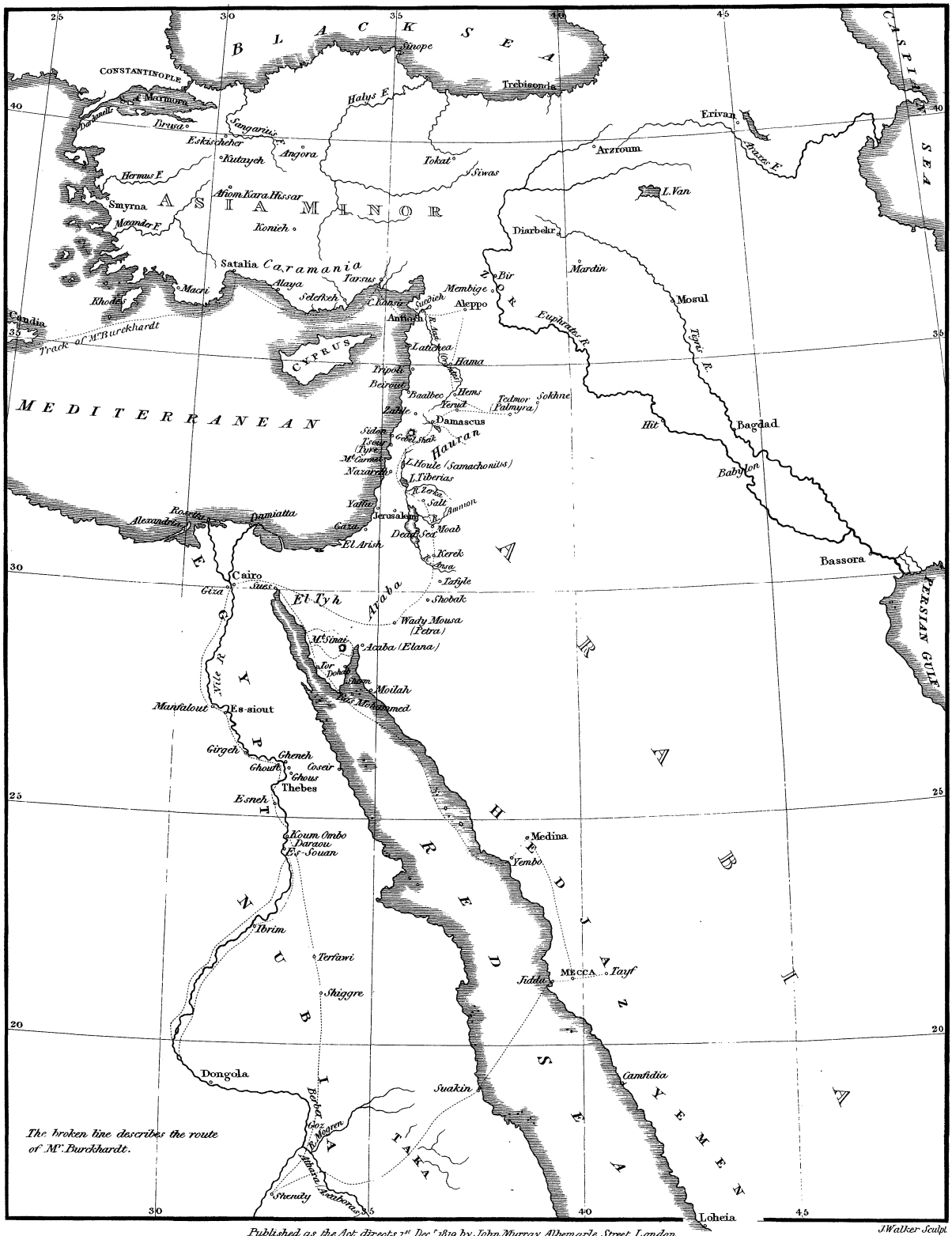
i　軌跡化される中東

本書でとりあつかう19世紀の旅行者による記述は，主に日記の形式をとっており，一日の進行，出来事，見聞されるものすべて，を記している。ここで，そうした旅行記の記述から，旅がどのようなルートをとって行なわれ，どのように主要訪問地とその間のルートが選択されていたのかを明らかにし，旅行記読者に，旅行者の軌跡としての中東が提示された，その様を示しておくことにしよう。

〔参考地図〕

BURCKHARDT'S TRAVELS.

To face the Memoir &c. page I.



Published as the Act directs 1st Dec. 1819. by John Murray Albemarle Street London.

J. Walker Sculpt.

from Burckhardt, 1819.

アプローチ

中東着岸は，アレクサンドリア，ベイルート，それにアンタキア（古代のアンティオキア）（Antakia／Antioch）付近の港において行なわれた。中でもアレクサンドリアが主たるポイントであった。こうした着岸点へ向うのに，マルタ島――ここは，ヨーロッパ人にとって，転地療養の土地であった。たとえば，サミュエル・コールリッジも，その理由でこの地を訪れている――，ギリシア・小アジア――コンスタンティノープルやスミルナ（イズミール）を含め――が経由点となっている。この中間点を通る航路の出発点は，必ずしも明らかにされているわけではないが，トリエステからの船旅が多いように思われる。また，ロンドンより中間点を経て中東へ直行する人々も居た。そうした中東の旅行者の中にあって古代人がとり，中世の十字軍も取った陸路を取り，ベルグラードを経てコンスタンティノープルへ向ったのは，キングレイクであった。本書で取りあげた旅行では，このルートを取ったのは彼一人である[128)]。

エジプト・ヌビア

ナイルの旅は，1863年スピークとグラントによって，その全域が踏破された。それまでの間，ナイルは謎の一つであった。しかし，エジプト・ヌビアの旅は，必ずしも，この謎への挑戦であったというわけではない。この地は，ナイル流域の古代遺跡めぐりとして，またナイルに対し，直角に，または，平行に，砂漠をわたる旅として，道がしるされつづける。

南方の地は，ブルクハルトによってシェンディ（Shendy）まで，レプシウスによってセンナール（Sennar）――ハルトゥームより青ナイルを遡上して――までが軌跡化された。他の人々は，第二瀑布行が普通で，フィラエ島（Philae）・第一瀑布で止めているのは少ない。それは，1813年３月22日に，ブルクハルトが，第二瀑布の北方下流に，アブ・シンベル神殿（Abu Simbelは，当時Ebsanbal, Ipsamboul, Ybsambul と表記された）を「発見」して，多くの旅行者を，そこまでひきつけたことによる。しかし，キングレイクなどは，下エジプトを訪れただけにとどまっている。

第一瀑布以南のナイル大彎曲部を直行する，ヌビア砂漠の旅はブルクハルトとレプシウスが行なっており，ナイルの東岸の砂漠行はレプシウスとベルツォーニ――彼は，ベレニケ（Berenice）の廃墟にむけて旅をした――の二人が行なっている。

シナイ半島

シナイ半島の旅は，エジプトとパレスティナを結ぶ通路を旅することとして表され，また，古代のエジプトよりパレスティナへの，イスラエル人の足跡をたどるものとして意味づけられた。

東西の通路，アフリカ－アジアの通路は，地中海岸にそう。アービィとマングルスは西から東へと通り，キングレイクは，往復している。ブルクハルトは，別のルートをとっている。それは，

ほぼ中央部を横切っていた。

古代イスラエル人の出エジプトの足跡は，すでに述べたようにそれを旅の目的としていたパーマーとドレイクによって，彼らの考える完全さをともなって，19世紀の旅の軌跡として明らかにされた。スエズを出てモーセの泉（Ayoun Mousa, 'Ayûn Mûsa, Ain Musaと表記，今は'Uyûn Mûsa）を経，フェイラン（Feiran, Firân）のオアシスを通って，モーセの山（Gebel Mûsa）——シナイ山——と聖カタリーナ修道院を中心点，あるいは，中間点として，ティイの岩の地帯（Gebel el Tîh，当時はTy, et Tîhと表わされた）を通りぬけ，ベールシェバでパレスティナを望み，ヨルダン川東岸のアーロンの山のふもとペトラを通り，イェリコ（Jericho）を望む，つまりは，約束のカナーンの地を望むまでの土地が，踏破され，軌跡化された。このシナイの道は，ブルクハルトがまずその一部をたどり，ペトラ行でラボルドやスティーヴンズやリンゼイが通り——もっともティイの地は通らずに，アカバ（Akaba, 'Akabahと表記，今はAqaba）から北上しているが——，ロビンソンが少し場所を変えながらたどった道であった。

シリア・パレスティナ

聖なる地の旅は，多様な軌跡を示している。ベイルートを中心に，海岸線の旅は，アドニスの川（ナフル・イブラヒム）や，聖ゲオルギウスのナフル・エル・ケルブ（犬の川），古代のシドン（Saida／Sidon）やティルス（Sour, Sûr, Tsour／Tyre）を結び，レバノン山を越えてベカーの谷（Bekaa, Beqaa, Bukâ'a／Coelesyria）を，古代のヘリオポリス，バアルベク（Baalbec, Ba'albeck）へと道がとられる。そして，内陸のダマスカスを中心として，旅はヘルモン山の周囲から，キリストのティベリアス（Tiberias／Tabaria, Tŭbarîyeh），ナザレあるいはナザレト（Nazareth），そして，イェルサレムへとつづく。ヨルダン川東岸は，古代バシャン・ハウランへ旅人を導き，ジェラシュ，古代のゲラサ（Djerash, Jerash／Gerasa，今はJarash）にケレク，モアブの都カラク（Kerek, Karak），そして，エドムの都ペトラが旅の軌跡の内にしるされる。こうしたダマスカスより南下の旅で，マホメットの助言者として知られた修道士・バヒーラー（旅人はボヘイラBoheiraと表記する）の教会があったと言われるボツラ（古名ボストラBusrah, Boszra, Bozrah／Bostra）が訪問される。イェルサレムは，その周囲の，イェリコやベトレヘムや死海の旅へと旅人を導き，このルートで，ペトラの旅を行なった旅人も多い。また，ダマスカスは，パルミラ，ゼノビアの都への旅の基地ともなっていた。北はさらに，カナーンの地を越えて，アレッポに通じるルートとなっていた。複雑に踏破されたシリア・パレスティナは，聖書の出来事を確証する，種々の場所をつなぐ軌跡として表出されてゆく。

アラビア

本書では，4人の旅行者の，アラビア半島の旅を取りあげる。ブルクハルトとバートンによる，メッカ・メディナの旅は方向が逆ながら，同じような旅であった。ただ軌跡は，ブルクハルトのものが海岸線の，バートンのものが直行の内陸部の，キャラヴァン・ルートであった点が異ってはいる。

半島内陸部は，パルグレイヴとダウティによって軌跡化されていて――すでに，このときまでに，G. F. サドライア（1789－1859）が1819年に，フィンランド人の G. A. ワリン（1811－1852）が1845－1848年に，半島内陸の旅をしている[129)]――，その二つの軌跡は一部が重なっている。どちらも，マアーン（Ma'ān）を起点とし，前者はリアド（Ri'aḍ，今はRiyadh）からさらに東のペルシア湾へと向い，後者は紅海岸へ，イスラームの聖地をさけるように向っている。この二人の旅によって，半島の中央部分が軌跡化されることとなった。

もう一つの旅は，バートンによるミディアンの旅で，スエズより直行の旅であった。これによって，シナイ半島と対峙する部分が軌跡化されたことになる。

ii　パノラマ

これまで，旅行者によって体験され，旅行記に書きこまれて，軌跡化された空間をみてきた。そこで，その軌跡化された空間を受けとめ，旅行記を読む側について，その眼差しを中心に考えてみることにしよう。

遠方にある空間，異民族の，異文化の場所は，その踏破を目ざす旅行者によって接近され，体験され，その空間の一つ一つの点は軌跡によって結ばれ，そこで知覚されたディテールは記述され，テクスト化されて集められた。そこでは，遠方という距離は，旅行者の手によってたぐり寄せられ，克服されたかにみられよう。日々の進行，体験，理解の記録は，その場を確かに指示し得るが故に，距離はゼロと化したかにみられよう。しかし，軌跡化された空間，テクスト化された遠方の世界を，旅行記という形で受けとめる読者は，自らの空間の中に居て，書かれたものとしての旅をたどり，再現前化された遠方の空間を味わうこととなる。そこにあるはずの匂いや，音や，味や，皮膚感覚を欠きつつも知覚的に，感覚的に持っている，その空間のイメージを心にいだきながら，自らとは異なった空間を意識しつづけることとなる。そこには，当然のことながら，距離の意識があると言わねばならない。それは，実体験によって旅行者が克服したと思われる距離，と考えることはできない。旅という形は，どのような手段を使ったにせよ，距離をゼロにするのではなく，距離を確認させるものとなる。この，書かれたものの距離によって，読者は，遠方の空間を見ることができるようになる。軌跡化されることで遠方の空間は，計ることのでき

る，図示することのできる，そして，それぞれの点が把握されることで全体がみえてくるような空間へと変化し，これを読者は受けとっているものと考えられる。テクスト化された世界は，全体を見通すことのできる，適当な距離をともなって，読者の遠方の空間となる。あるいは，旅行記を読むことは，このような距離を作成するものと考えられる。さらに，こうして作成された距離は，他者世界に対するイメージを保存し，変形させ，意味づけるに充分な，操作可能な距離として，読者に与えられるとみられよう。

このような作られた距離は，別の形をとって旅の世界に現れることに注目してみよう。それは，鉄道によって生まれた景色，パノラマ的眺望のことである。ヴォルフガング・シベルブシュが，その著書，『鉄道旅行の歴史』の中で，このパノラマについて明らかにしている。

ゲーテに代表される18世紀の旅では，通過される一点づつが強く体験され，一つ一つの連続した印象群が旅を形づくり，すべての細部が知覚されていたのに対し，鉄道は，旅での共感覚を失わせ，近くを通り過ぎるものを見えぬものとし，遠くにあるものをゆっくりと展開する風景とする。

> 空間を短縮する鉄道の速度は，それぞれの独自性のために全く異なる領域に属する光景や対象を直接結びつけて，次々にそれを披露する。このように連続する光景を受け入れる車窓の眼差(まなざ)しには……新種の能力が認められる。これは，車窓の彼方に展開する種々様々のものを，その間の区別をつけずに受け入れる能力である。鉄道が早い動きで作って見せる舞台面は，強調するまでもなく，パノラマである[130)]。

たとえば，1840年代初めに，鉄道を体験して，アンデルセンは次のように述べている。

> …遠く地平線の辺りに目を向けると，そこではすべてのものが静止しているように見えるので，辺りは一望のうちに収められ，その印象をはっきり捉えることができる[131)]。

「まるでわが家にいるよう」[132)]に，車中に居て，ゆっくりと展開する物と，遠くにあるほとんど変化しない物とが作る風景を味わうことのできる鉄道の旅がここに指摘されている。その風景は，すぐ近くにあるものを消し去って，距離を強調する。そして，それは，共感覚を欠いているのだ。

> （昔の旅人）の意識は風景の中に彼らを編みこんでいたのである。速度のために前景が解消すると，この立体感覚も旅行者から喪失する。旅行者は，遠いものも近いものも包含し

ている「全体空間」から，抜ける。……鉄道の速度は，以前は旅人がその一部であった空間から，旅人を分かつのである。旅人が抜けてしまった空間は，旅人の目にはタブローになる……。……パノラマ的にものを見る目は，知覚される対象ともはや同一空間に属していない。この目は，それが乗って移動する装置越しに，対象，景色その他を見ている[133]。

こうした旅行記と鉄道による距離と風景の類似性から，旅行記の読者は，旅行記が示し，また，旅行文学が作り出す，旅という形に乗って移動する旅人として，旅行記が書きしるしたものをパノラミックなものとしてながめる，という構図を想定することができるのではなかろうか。多くの，くり返し記述された空間は，読者にとっては，一つの全体像として現われる。するとそれは，タブローをはりあわせ，眼前に展示された，パノラマ館のパノラマに近似すると言えるだろう。神の如き高みからの世界の光景は，18世紀末にパノラマとして生み出されていた。細部が描かれた絵が建物のぐるりにはりつけられ，中央の高所からそれがながめられるという一種の幻影がそれである[134]。パノラマ館は，自分の属する空間から，束の間脱出させてくれる。しかも，その眺望点は，ほんの少し日常の空間を出た所で，特別な旅を必要とするものではない。そこから，創り出された，作成された距離に，一つの光景がながめられる。ちょうど，日常から少しはなれ書物の中にのがれ出すと，作成された距離に，異国のトポグラフィーが与えられる，旅行記読者の世界の如く。このパノラミックな眺望は，ミルトンが『失楽園』の中で，楽園を追放されるアダムが，楽園の最も高い山から，神の導きによって，眺めることのできた，地球の半分の，歴史的なトポグラフィーとして，さらに，救済の，再生の風景として提示していたもの[135]と考えることができよう。こうして，アダムが眺める人類の危機が，距離を得て眺められるように，旅行記における旅人の危険は十分楽しめる距離を得て眺められると指摘されよう。これは，この時代の崇高の美学のうちにみとめられたものと言わなければならない。

（エドマンド・）バークは，崇高さの経験を，何か激烈で，恐怖心をおこさせるものを安全な距離から楽しんで目撃する，といった見物人の娯楽として，暗に述べている[136]。

見るものを圧倒し，おびやかし，危機に投ずるものから身をかわし，それからのがれ得る場所から見物できてこそ，その恐ろしくも魅力的な光景を享受できるというものであろう。この崇高美の享受，恐ろしくも魅力的なものを見物する意識を反映したのが，クロード・グラス――黒の裏張りをつけた，円か楕円形の凸面の鏡で，人は，見たい物や風景をこれにうつし出し，淡い色調のもとに見ることができ，その鏡はまるく縁どられている。この鏡にうつし出された風景には，クロード・ロランの絵のように，いくらかぼけたような，一様な色調が与えられるので，この名

がつけられた――であったことは良く知られている[137)]。この人工の単色の反映は，ロマン派の世界では，より自然な，反映されるものを越えるような，水の反映にとってかわられたとは言え，見られるものを，安全に，そして，距離をもってうつし出し，再現前化される手法として，コンテクストを形づくっていたことは確かなものと言わねばなるまい[138)]。従って，このコンテクストに置かれることで，旅行記は，読者にとって，安全な距離をとって眺められる，反映された風景，再現化されたトポグラフィーの集積とみられることになろう。一日一日の出来事や光景は，断片的に記されつつも，一定の距離からみられるという図式によって，全体としてのまとまりを持つトポグラフィーとして読者の手元に置かれることになる。それでは，パノラミックな眺望による全体的なまとまりとは，いかなる形をもつものなのであろうか。軌跡化され，パノラマ化された中東は，それまでのイメージと交差し，いかなる形象を，旅行記の内に生み出したのであろうか。真にキリスト者の世界が，異教と幻影に隠蔽されて来た，歴史のうちにある中東は，旅行者の目にはどのように覆われているのであり，また，いかにして旅行者はその覆いをはずし――つまりは，カヴァーされた世界が，発見（ディス＝カヴァー）されることになって――，どのような世界を，トポグラフィーを見つめるかを，問わねばなるまい。

1 章（中東のテクスト化） 注

1) Legh, 1816, p.177n.
2) Legh, 1816, pp.45－46.
3) Legh, 1816, pp.91－92.
4) Legh, 1816, pp.175－176.
5) Burckhardt, 1819, p.16.
6) Legh, 1816, pp. v － vi.
7) Burckhardt, 1919, pp. iii － v.
8) Sim, 1969, pp.30－35. シムによれば，ブルクハルトは，フランス語よみのルイで呼ばれていた，と言う。ここでは彼のスイス人としての位置に配慮してヨーハン・ルードヴィッヒを使うことにする。Sim, 1969, p.32.
9) Hallett, 1964, p.294. Dawson & Uphill, 1972, p.170.
10) Hallett, 1964；Hallett, 1965. 本書でアフリカ協会員について言及する場合，特に注記せぬ場合は，ハレットのリスト（Hallett, 1964, Appendix B）によっている。
11) このクラブの由来など詳しいことは不明だと，ハレットは述べている。Hallett, 1964, p.13.
12) Hallett, 1964, p.22.
13) 19世紀の史学史・歴史思想史を明らかにしたグーチによれば，リークは「近代ギリシアのパウサニアスである」と言われている。グーチ，1971－4，（上），40頁。

14) バンクスの旅については，Curley，1976，p.34，Thacker，1983，p.162を，ハミルトン，アバディーン伯，ノースの旅についてはTregaskis，1979，pp.49，11 & 112－115を参照。

15) Tregaskis，1979，p. 4 .

16) Tregaskis，1979，p. 4 . Searight，1979，p.36. Black，1985，p.23.

17) Damiani，1979，p.111. トレガスキスは，この派遣が協会の変化を示している，としている。Tregaskis，1979，p. 4 － 5 .

18) Damiani，1979，p.127. Tregaskis，1979，p. 5 . Searight，1979，p.75.

19) Damiani，1979，pp.108－109.

20) Damiani，1979，p.109.

21) Damiani，1979，p.127.

22) Adams，1983，pp.65 & 231. 本城，1983，13－14頁。

23) Curley，1976，p.67.

24) Adams，1983，p.189からの引用。

25) 以下，グランド・ツアーの教養なるものについては，ブラック女史の研究によった。Black，1985.

26) Black，1985，pp.123－124，233.

27) ジェネップ，1977，16－17頁参照。

28) ジェネップ，1977，18頁。

29) ジェネップ，1977，200頁。

30) グランド・ツアーの家庭教師をイニシエイターと述べたのは，アダムズである。Adams，1983，pp.230－231.

31) Eliade，1958，pp.124－136.

32) Adams，1983，pp.150－152.

33) ベルツォーニについては，フェイガン，1988に詳しく述べられている。

34) Belzoni，1820，vol. I . pp.viii－ x .

35) Belzoni，1820，vol. I . pp.33－44.

36) Searight，1979，pp.196－ 7 & 260.

37) Dawson & Uphill，1972，p.23. 詳しくはフェイガン，1988，第二部参照。

38) グーチ，1971－ 4 ，(下)，170－172頁。Dawson & Uphill，1972，pp.173－174.

39) Lepsius，1853，p. 5 .

40) Searight，1979，pp.201 & 239. Dawson & Uphill，1972，p.33.

41) Lepsius，1853，p.12.

42) Black，1985，pp.214－215.

43) Levine，1986，pp.13－99.

44) ここでは，20年代までを初期，30年代－50年代を中期，60－80年代を後期としておく。

45) Smith & Hitchcock，1863，pp.26－67.

46) Robinson，1841，vol. I，pp. 1 － 2 & ix.

47) Robinson, 1841, vol. I, p. 3.

48) Robinson, 1841, vol. I, p. xiii. Smith & Hitchcock, 1863, p.69.

49) Robinson, 1841, vol. I, p. vi.

50) Smith & Hitchcock, 1863, p.71.

51) Robinson, 1856, pp. i & v.

52) Porter, 1855, vol. I, pp. iii − v.

53) Porter, 1855, vol. I, p.149n.

54) Robinson, 1856, p.473.

55) Robinson, 1856, p.442.

56) Dawson & Uphill, 1972, pp.149−150.

57) Palmer, 1871, pp. 1 − 4.

58) Levine, 1986, pp.101−105, 35 & 123.

59) Palmer, 1871, p.283.

60) Searight, 1979, p.214. 彼女は協会(ソサエティ)としているが，この名称が使われたかどうか定かではない。ドーソンやグーチは基金(ファンド)としている。Dawson & Uphill, 1972, p. xiii. グーチ，1971−4，242頁参照。

61) パールマン，1987，141−142頁。

62) Palmer, 1871, pp.282−284.

63) Hastings, 1978, pp.228−231. Brodie, 1967, p.362. パールマン，1987，157−159頁。

64) Brodie, 1967, p.265.

65) Hallett, 1964, pp.242−245.

66) Brodie, 1967, pp.87−88, 104. バートンは，ノートン・ショーを介して，王立地理学協会と関わっている。

67) Brodie, 1967, pp.119−138.

68) このとき，種々の事件にまきこまれ，結局，1871年8月に，バートンはベイルート領事をやめさせられた。ドレイクは後に残って，この旅行記の後半の旅を一人で行なっている。Brodie, 1967, pp.258−261.

69) Brodie, 1967, pp.281−283.

70) Brodie, 1967, pp.35−37, 45 & 282. Burton, 1878, p. 1.

71) Tidrick, 1981, p.103.

72) ウィリー，1985，97−107頁参照。

73) Tidrick, 1981, pp.86−88. Freeth & Winstone, 1978, pp.155−156.

74) Freeth & Winstone, 1978, pp.156−158. Tidrick, 1981, pp.89−90. Brent, 1977, p.122−123.

75) Tidrick, 1981, pp.94−103. Freeth & Winstone, 1978, pp.191−192.

76) たとえば，Burton, 1855−6, vol. I, p. xxi. cf. Tidrick, 1981, pp.88−89.

77) Black, 1985, p.96.

78) Addison, 1838, pp.viii−ix.

79) Black, 1985, p.244.

80) Curley, 1976, p.95.

81) Curley, 1976, pp.100－103 & 212－214. Thacker, 1983, pp.173－175.

82) Black, 1985, pp.246－247.

83) 中川, 1985, 8－12頁。Searight, 1978, p.229.

84) Wilkinson, 1843. cf. Searight, 1979, p.230.

85) Edwards, 1877, p.36.

86) Stephens, 1837, p.152－153.

87) Irby & Mangles, 1823, pp. 2 － 3 .

88) Irby & Mangles, 1823, pp.163－164.

89) Irby & Mangles, 1823, p.232.

90) Irby & Mangles, 1823, p.333f.

91) Halls, 1834, vol. I, p.488 ; vol. II, pp.52, 121－122 & 133.

92) Dawson & Uphill, 1972, pp.179－180.

93) Laborde, 1836, p.42.

94) Lindsay, 1838, vol. I, p.40.

95) Abrams, 1971, pp.239－241.

96) 『ヘブル人への手紙』11章, 13－14。――でかこんだ言葉は KJV の訳語である。cf. Abrams, 1971, p.164.

97) Abrams, 1971, pp.48－50.

98) Curley, 1976, p.42.

99) Abrams, 1971, pp.124－128.

100) Abrams, 1971, pp.284－285.

101) McFarland, 1981, pp. 7 －11.

102) Kinglake, 1844, pp.97－98.

103) Gaury, 1972, pp.44－45.

104) Warburton, 1845, vol. I, pp.157－159.

105) Gaury, 1972, p.19. ウォーバートンはその旅行記をミルンズに捧げている。

106) Burton, 1878, p. 1 .

107) Waterfield, 1969, pp. 1 － 2 & 25－39.

108) Edwards, 1877, p. 2 .

109) Adams, 1983, p.67.

110) Adams, 1983, pp.152－153.

111) Jordan, 1971, p.57.

112) Jordan, 1971, p.11.

113) McFarland, 1981, p.333.

114) Carnochan, 1977, p. 7.

115) McFarland, 1981, p.79.

116) Carnochan, 1977, pp.163－166.

117) Reed, 1983, p.86.

118) Curley, 1976, p.128.

119) Abrams, 1971, p.181.

120) Abrams, 1971, pp.182 & 307－308.

121) Abrams, 1971, pp.145, 182 & 308. Curley, 1976, pp.89－90.

122) Abrams, 1971, pp.145 & 182. Curley, 1976, pp.89－90 & 129－130.

123) ソンタグ，1982，31，32，36，47，54，56，68－69頁。

124) ソンタグ，1982，20，24，26，63頁。

125) ソンタグ，1982，19頁。

126) ソンタグ，1982，22，50，53，110頁。

127) Curley, 1976, pp.243－4. Abrams, 1971, pp.358－363. McFarland, 1981, pp.44－45.

128) 古代の巡礼ルートについては，ハントが詳しく述べているし，近代のイギリス人の東へのルートは，ブラックが詳しく述べている。近代では，このルートは，ウィーン－コンスタンティノープル間の主要なルートであった。Hunt, 1982, pp.50－58. Black, 1985, pp.27－29.

129) Sadleir, 1977, Wallin, 1979.

130) シベルブシュ，1982，78頁。

131) アンデルセン，1986，30頁。

132) シベルブシュ，1982，77頁。

133) シベルブシュ，1982，80頁。

134) Carnochan, 1977, pp.102－103. オールティック，1990，II，11－126頁参照。

135) 『失楽園』第11巻，380行以下。

136) Heffernan, 1984, p.122.

137) Thacker, 1983, p.142. Heffernan, 1984, p.207. 高山，1985，99頁。

138) cf.Heffernan, 1984, pp.207－208.